
光と奴らのスクールライフ！？

ワタユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光と奴らのスクールライフ！？

【Nコード】

N4947H

【作者名】

ワタユウ

【あらすじ】

この小説は、常識人&女顔と言うスキルを持つ童顔高校生、日野光と、変人に変人を足し、更に変態を掛けたような変人達と繰り広げる。愉快、痛快な学園コメディです！！。（月3〜5回更新したいです）

短いプロローグ

皆さん、どうも初めまして。

俺はこの小説の主人公ひの日野光だ。

さて、いきなりだが、皆さんに質問がある。

なあ、変人ってどう思う？ …………… いや、心理テストとか

じゃないぞ？ ただ単純に皆さんが変人についてどう思ってるか聞きたいだけだ。

さて、もう一度聞くぞ。皆さんは変人についてどう思ってるんだ

…………… ふむふむ、歴史に名を残す人達はほとんど変人って、他は？ …………… なるほど、歴史はいつも変人が変えているって、

まあ、こう聞いたら、聞こえは良いな…………… 知らないって、幸せだな…………… こほん、いいですか皆さん、確かに歴史に名を残した人のほとんどは変人です。（例、トーマス・エドソン）しかし、変人です。

いいですか、変人と言うのは非常に迷惑な奴らです。もしあなたの近くに変人が居れば、ダッシュでそこから逃げてください。でなければあなたが不幸になります。

ええ、なりますとも。

…………… 失礼、話しが脱線しました。

俺が何を言いたい事は、変人には、『絶・対！！』関わってはいけません。俺が言いたいのはこれだけです。

…………… はい？ 何でそこまで言うかって？ ……………

んなもん…………… 俺が変人に振り回されてるからに決まってんだろーがああああああああああああああ！！！！ （主人公が

収まるまで少々おまちください）…………… 失礼、とりあえず。

俺が言いたいのはこれだけです。しかし、最後にもう一回言わせていただきます。

変人には、『絶・対！！』関わってはいけません。じゃないと…

……俺みたいになりますよ……。

第一話 俺と親父（前書き）

水月様、勝手に作品の名前を出して、すいませんでした！

「……………はっ！ そうだった！ いっけね忘れてた『コツン♪』」
「気持ち悪！ ……皆さん、想像してごらん。」

三十代後半の親父が、舌を出し、そして自分の頭を右手で『コツン♪』って、やってる姿を……

「まあ、とにかく転勤する事になったから、光も荷物まとめとけよー」

「はいはい……………はっ？ 荷物まとめろ？」

俺は、自分の耳を疑った、何で俺も荷物まとめなきゃなんののだ？

「あの、親父？ それは一体……」

「あ、学校の事なら心配しなくて良いぞー、とつくに編入手続きしてるから」

「や、だから親父？」

「そうそう、このアパートも解約したから、大家さんが早く荷物を持ってってくれだって」

「おい……………糞親父……」

「だから、早く荷物をまとめて————」

「ふざけんなあああああああああああああああああああああ
あ……………」

「ぎゃあああああああああああああああああああああ
……………」

俺は、バカに世紀末の救世主並のパンチのラッシュを食らわして
やった……………コンクリートは碎けるな（たぶん）

「はあ……………はあ……………親父……………質問に答え————」

「……………」

返事がないただの屍のようだ。

「……………え？ マジ？」

「……………」

返事がないただの屍のようだ。

「嘘だろ！？ おい親父！ 大丈夫か親父！」

冗談じゃない！ 俺が親父を殺したなんて！

「と、とりあえず119に……」

連絡しようとしたその時。

『プス』

「いた！」

首のあたりに、何やら痛みがはしった、その瞬間。

「……あれ？ ……なんか……急に眠気が……」

や、やばい……落ち……る……

「よし……眠ったみたいですね……」

男は銃を仕舞い、近くにいた屍（？）に話しかけた。

「……輝樹さん……いつまでそうしているおつもりですか？」

男がそう言うと、輝樹と呼ばれた男はムクリと起き上がり。

「……あり、ばれた？」

と言って、何もなかったかのように立ち上がった。

「当然です、何年あなたの親友やっているとってるんですか？」

「一万年と二千年前から……」

「はぁ……もういいです」

男は、やれやれと言う具合に溜め息をついた。

「ははは、悪い悪い、冗談だ、今年でちょうど20年だな」

もう一人の男は、特に悪びれる様子もなく謝り、本当の年月を言った。

「正解、と言うかまだ20年ですか……」

「ああ、あの運命的な出会いから20年だ」

「嫌な運命ですよ、全く」

「まあ、そんなことより……わりい！ 手伝ってくれてサンキュー
鳴海！」

「全くですよ、自分の子供ぐらい、自分でなんとかしてくださいよ
……」 すると男は……。

「いやー、光はあいつに似て狂暴だからなく……まあ、あいつ似て
可愛いけど」

と言って、何かを思い出してニヤニヤと笑いだした。

「その可愛い息子に麻酔銃を撃つように頼んだのは何処のどなたで
したっけ？」

鳴海がそう言うのと、輝樹は鳴海から目を反らした。

「……さーて、光の荷物をまとめるか」

「都合の悪い事は無視するんですか、これ借りるのにどんだけ苦労
したか……」 鳴海はそう言って、麻酔銃を取り出した。

「アーアー、キコエナーイ、ナニモキコエナーイ」

しかし輝樹は、耳を塞いで子供みたいな事を言い出した。

「はあ……そういえば、影理さんは元気なんですか？」

鳴海がそう言うのと、輝樹はこう言った。

「元気元氣の大元氣、あの超健康体質は昔と変わってないしな」

「はあ、そうですか、今はまた旅に出てるんですよね？」

「ああ、今回は「8ヶ月、旅してくる！」って言って、旅に行った
なあ……」

「ははは……影理さんは変わってませんねえ……」

「ははは……まあ、明日帰ってくるって言ってたけどな……」

「へ？ まだ旅に出て半年なんですよね？ なんでなんですか？」

「いや……勝手に新しい家を決めた俺の骨を折りに……な」

「うわあ……本当に全く変わってないですね……」

「……保険に入ろうかなあ……」

「……そ、それより、本当に転入手続きは済んだんですか？」
すると輝樹は、やや声のトーンを落としてこう言った。

「ああ……あのババアがバツチリやってたよ、それと、光が住んでるアパートと、俺と影理が住んでるマンションの解約もバツチリやってやる……」

「は、ははは……」

「本当、あのババアだけは……いつか覚えてろ！」

「ははは……にしても、光くんが可哀想ですね……『あの学校』に通う事になるとは……」

すると輝樹は、更に声のトーンを落としてこう言った。

「ははは……全くだ、光、恨むなら俺じゃなくてババアを恨んでくれ、そしていつかあのババアを二人で蹴り倒そう」

「その時は私も入れて下さいね、……それより、あの人は本当に無理矢理ですね……光くんにもお知り合いがいるでしょうに」

「……まあ、会いに行こうと思えば会えにいける距離だからなあ……」

「まあ、そうですが……はあ……」

鳴海は、もう何回ついたかわからない溜め息をついた。

「さて、じゃあ光を車に乗せるか」

男は、そう言って光を車の後ろに乗せた。

そして輝樹は、眠っている光にこう言った。

「さて光、お前がこれから通う学校は、とてつもなく『へんな』学校だ、楽しい学校……だけど、常識が通用しない所だ、……まあ、お前でも大丈夫だろ！……たぶん」

「たぶんですか……」

「たぶんだ……さて、やるか！」

輝樹の言葉を聞いて、鳴海は手と手を合わせてこう言った。

「……光くん、あなたの冥福をお祈りします」

「縁起でもねえ事言うな！……俺も思ってるけど……さて、そろ

そろ本当に光の荷物を整理しないと、鳴海手伝えー」

「はぁ……仕方ないですね……」

鳴海は、やれやれと言う具合に言った。

「よし！ やるか！」

「ええ、光くんの目が覚める前に」

そうして、二人は光の荷物を整理しだした。

こぼれ話

「なぁ鳴海……」

「？ なんですか」

「光のベッドの下からこんな本が……」 「……まあ、健全な男子は
持ってると思いますか……」

「……これは俺が回収しよう」

「欲しいだけじゃないです」

第2話 『ピー』本はベッドの下に隠していません

「……あれ……俺は一体……」

目が覚めると、そこは――

「知らない天井だ……」

うん、本当に知らない天井だ……そこ、お約束とかテンプレ言うな、俺だって思ってるんだから。

「さて……ここは一体どこだ？」

俺が今いる場所は、大体六畳ぐらいの洋室、そしてベランダがあり、ダンボールがそこらじゅうにある部屋だ。

「んで、俺が今寝てたのは……」

青と黒のしましま模様の敷き布団、そして、真っ白の布団に『拳』と、大きく書かれた掛け布団が敷かれいる折り畳み式のベッドだ……

……うん、これは――

「知ってるベッドだ」

ふっ、これはテンプレじゃないだろ（たぶん）。

「にしても……なんで知らない部屋に俺のベッドが……」
そう考えた時だった。

『た〇ー〇い〇身〇捧〇ー♪〇ー〇え〇す〇て〇りー♪』

ポケットから、とあるゲームの作中で流れる、歌が聞こえてきた……あれ？。

「俺この歌いれたっけ？」

確か、これ着うたフル何処にも無かったような……。

「……とりあえず携帯見るか……」

ポケットから携帯を出し、携帯を開いた。

「……親父からメールだ……」

俺は、何か嫌な予感を感じながら、新着メールにカーソルを合わせた。

「にしても、さっきの歌はなんだったんだ？ 俺が入れたのかあ……」

…」

そして、俺はメールを開いた、題名は……。

『(歌をくれたのは)私だ』

……せーの。

「お前だったのかあああああああああああああああああ！
！！」

俺は、携帯のディスプレイにツツコンだ。

「と、とりあえずメールの内容は……」

メールの内容は……

『H A H A H A！ 驚いたかーい、マイ・サン！』
イラ

「もう……この親父を殺すか……」

よし、旅に出てる母さんに協力してもらうか……。

『ま、待ってくれ光！！ 母さんにだけは！ 母さんにだけはああああああああ！！！！』

「黙れ三十六歳」

『ひどい！！ 僕は永遠の十六歳だ！！』

……あれ？

「……何か……メールと会話成立してね？」

ま、まさかな……

『H A H A H A！！ メールと会話成立するわけないZE！！』

「だよなあ………って、成立してるじゃねーかああああああああああああああああ！！！！」

ま、まさかこの親父、未来が見えるのか！？

『そのとうり！ ふはは！ 見える！ 私にも時が見える！』

「シ〇ア！？ シ〇アなのか！？」

『まあ、冗談は置いという』

「冗談かい！！」

ちょ、ちょっと信じかけた……ちょっとだからな！！

『ツンデレキターーーーーー！！！！』

[illegible]

『H A H A H A! 父は息子の考えてる事がわかるのだからしかたないY O!』

腹立つ！ 腹立つけどすごい！

『H A H A H A! ……さて光、今日の事を思い出さないのかY O
!』

「……今日？」

なんだ……頭になんか引っ掛かるような……。

『アレだよアレ、ア・レ・だ・よ♪』

その瞬間、俺の記憶がフラッシュバックした。

「あ……あああああああああああああああ……！！　思い出したあああああああああああああ……！！」　全部……思い出した！！」

出したああああああああああああああ！！！！」

全部……思

「H A H A H A ! 思い出したみたいだな!」

そうだ……そうだった……今日……

「……今日スパーが肉を安売りしてるんだあああああああああああああああ！！！！」

俺とした事が……すっかり忘れてた！！

『そうそう肉が……って、違うよ!! 転勤だよ! 転勤! それに、光がボケたら駄目だ!』

……転勤？ ……あ。

「思い出し（光に叫ばしたら、文字数を稼いでいるように見えるので略します、b y作者）！！！！」

『よ、良かったぜ……』

「あ、ああ……って……なんで俺が転勤についてかなきゃなんねーんだー！！」

『……えーと……あ、そうだ』

「なんだよ！？」

俺はぶちギレながら言った

『……荷物片付けといてくれ』

「……は？」

『僕の知り合いもそっちに行ったから！ じゃ、後はよろしく！！』

END』

「あ！ 待てクソおや——」

俺がそう言おうとした時。

『ピンポーン♪』

玄関から、呼び出し音が聞こえてきた。

くっくくく

第3話 初対面の人に木刀を向けてはいけません

『ピンポーン♪』

「……………まさか……………親父の知り合い？」

そう察した瞬間、俺は部屋から出て、玄関を開けようと思った。
しかし。

「……………親父の知り合いに……………普通の奴いたっけ？」

そう、親父の知り合いは、ろくな奴しかない。戦闘狂とか、変態紳士とか……………よし。

「開ける前に、親父の知り合いに襲われた時のために、護身用の木刀探さないとな……………」

へ？ 何で木刀なんか持ってるかって？ あれだよ、修学旅行のお土産。

「うー……………段ボールがありすぎてわからん……………」

今この部屋は、そこかしこにダンボールが散乱している。
ちなみに何故か全てのダンボールにミカンが書かれている。

「……………ベタにベッドの下とか」

そう思っ、ベッドの下を見てみると――。

「……………まじであった」

俺の愛（木）刀、『千子村正（木製）』がそこにあった。

へ？ なんてそんな妖刀チックな物を持ってるかって？ だから、

修学旅行のお土産。

「？ なんか紙が貼ってる……………」

文字が書いてあるので、見てみたら……………

『正解、良く出来ました（花丸）b y 貴方のお・や・じ（はーと）』

「……………『ビリっ、ビリ！』」

紙を破ってやった、ちなみに、怒りで破ったのではなく、（はーと）がキツかったので破った。

『ピンポーン♪』

――。

「あの……新手の歓迎ですか？　だとすれば、即刻止めていただきたいのですが……」

親父の知り合いには絶対いないような、まともそうな男性が立っていた。

「え？　あの……」

俺はポカーンとなった……だって……すげーまともっぽい人じゃん！？。

「あ……あの……失礼ですが……」

俺は、何とか口から声を吐き出して、目の前の人に聞いてみた。

「？　なんででしょうか？　……その前に、木刀をしまってもらえますとありがたいのですが……」

「あ！　す、すいません！！」

俺は、急いで木刀をしまった、何処にしまったかは気にしないでね。

「いえいえ……で、なんでしょうか？」

「あ……あの……もしかして、俺の親父、日野輝樹ひのてるぎのお知り合いの方でしょうか？」

俺の質問に、まともっぽい人はこう答えた。

「ええ、その通りです。あ、ご紹介遅れました、私は海空鳴海うみそらなるみと言
う者です、貴方のお父様……輝樹さんの親友……見たいな者ですね」
……まじっすか？

くつづく

第4話 土下座と流血とカレー……何の関係性もない

「……マジですか？」

「マジです」

その言葉を聞いた瞬間、光は両足の膝を地面につけ、両手を前に置き、頭を下げた。まあ、俗に言う。

「すいませんでしたああああああああああああああああああああああああああああああ……」

土下座である。手の開き具合、頭の下げ具合、声の大きさ、何処を取ってもパーフェクトな土下座であった。

もしこの場に、土下座審査員が居たのならば『100点！ 100点じゃああああああああああああああああああ……！』

と、絶賛されるぐらい完璧な土下座であった。

「……………」

鳴海沈黙

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

『ガンガンガンガン！！』

光は謝る& a m p;頭を上げたり下げたりを高速で繰り返して、頭をかなり打っている。

「だ、大丈夫ですので頭を上げてください！」

鳴海は慌てて止めに入った、それもそのはず、光が高速で頭をぶつけている為、額から血が出始めているからだ。

しかし、光には聞こえなかったのか。

「すいませんすいませんすいませんすいませんすいませんすいませんすいませんすいませんすいませんすいませんすいません……」

『ガンガンガンガンガン！！……！』

光は更に頭を叩きつけている。ちなみに、かなりの血が出ている

「きゅきゅきゅ、救急車……っ！」

俺がポケットから携帯をとり出そうとしたその時。

「だ、大丈夫ですか!？」

キッチンらしき所から、かなり整った容姿と、茶色い髪にちらほら目立つ白髪を持つ、見たところ二十代後半ぐらいの男が出てきた……って。

「あああああああ!! さっきのまともっぽい人！」

「あ、どうも」

そうだ! 思い出した! 俺この人に刀を向けて……それを思い出した瞬間。

俺は両足の膝を床に付け、両手を前に置き、頭を下げようとした、しかし。

「本当にごめんなさ——」

『ガシッ!!』

海空さんに、肩をがっしり掴まれた、その時、少しチクリと何かが刺さった気がした。

「ル、ループになるのでやめてくださいね……」

「あの……いろいろ本当にすいませんでした」

俺は、まともっぽい人に頭を下げた。

あれから数分間、俺が土下座しようとして、この人が止めると言うルートが続いた。

「いえいえ、それより頭を上げてください」

その言葉を聞き、俺は頭を上げた……ああ……まともな人だ……。

「あああああああああああああああつ!!!!」

わ……忘れてた!

「あの! ごめんなさ———」

俺は、両足の膝を床に付け、両手を前に置き、頭を下げようとした、しかし。

『ガシッ!』

「ル、ループになりますので……」

また海空さんに肩を捕まれた為、出来なかった。

「あの、片付けていただき、ありがとうございます」

また海空さんに止められそうなので、普通に頭を下げた。

「いえいえ、ただ……輝樹さんと影理さんの部屋は片付けましたが……光君の部屋は、片付けてないので……片付けた方が良かったですでしょうか? 輝樹さんや影理さんの部屋はともかく、光くんの部屋は勝手に片付けて良かったかわかりませんでしたし……」

な……何てまともな人なんだ……親父の知り合いの変人だったら……プライバシー関係ねー! って、感じで荷物荒らすだろうなあ……見られて困る荷物はないけど。

あつ、ちなみに、影理と言う人は、俺の母さんだ。

「あの……片付けた方が良かったでしょうか? だとしたらすいません……」

「あ! 全然大丈夫です! ありがとうございます! あ! じゃあ、部屋を片付けて来ます!」

「あ、はい、わかりました」
こうして、俺は部屋を片付ける事にした。

「お……終わった……疲れた……」
だいたい2時間ぐらいで、荷物がある程度片付けた……残りは明日だ……。

「にしても……腹減ったなあ……」
考えたら……朝ご飯以外何も食べてないなあ……昼ごはん買いに行こうと思ったら、親父が来たし……。

「……食べる物あるかな……」
その思った時だった。

「あれ？ ……なんだこのにおい？」
部屋の外から、カレーのいいにおいがしてきた。
「……なんだろう？」

俺は、とりあえず部屋を出た。

「うーん……リビングから匂いがするな……」

てか、何故カレーの匂いがするんだ？。

「まさか……」

海空さんが作ったとか？ ……とりあえず、俺はリビングに入ってみた。

するとそこには、想像通りの光景があった。

「あ、片付け終わりましたか？ お疲れ様です。あ、お腹空きましたでしょう？ ちょうど今カレーが出来ましたので、良かったら食べてください」

キッチンから、カレーを運んでいる。海空さんがいた……それを見た瞬間、俺は――。

「……光くん？ しつこく言いますが……ループにするおつもりですか？」

「……カレーを作っていただき、ありがとうございます！」

普通に頭を下げた……だって、なんか凄い殺気みたいなの感じたし……。

「えーと……いただきます」

「はい、いただきます」

とりあえず、俺はカレーを食べてみた……。

「……美味しい……」 な、何だこのカレー！？ うまい！ うま

すぎる！ ……スパイシーな香り、ほどよく煮えた野菜、口に入れただけで溶ける肉……そして絶妙な味付け……完璧だ……完璧すぎるカレーだ！。

「お口にありましたか？ まだあるのでどんどん食べてくださいね」

「あ、ありがとうございます！」

よし！ 食べるぞ！。

（三十分後）

「ごちそうさまでした！ お……お腹いっぱい……しあわせ……」

「お粗末様でした」

さ……さすがに五杯は食い過ぎたか……でも、美味しかった……。

「では、私は食器を洗って来ます」

そう言いながら、海空さんは椅子から立ち上がり、キッチンに行こうとした。

「あ、待ってください！ 俺が洗います！」

俺は立ち上がって、海空さんを止めた。

「え、ですが……」

「いえいえ、洗わせてください！ やって貰ってばかりじゃ申し訳ないんで！」

「はあ……しかし……」

「じゃあ、洗って来ます！」

俺は食器を持って、キッチンに向かった。

「ふう……完了！」

いやー、やっぱジ○イはよく汚れが落ちるなあ……うん、時代はやっぱりジョ○だよ○ヨイ。

キ○キ○ットもいいけど。

「あの、終わりましたか？」

リビングに戻ると、申し訳なさそうな顔を顔した海空さんがいた。

「あ、はい終わりました」

「そうですか……ありがとうございます」

「いえいえ！ お礼を言うのはこっちの方です！ 何から何までやっていただき、ありがとうございます！」

「いえ、こちらこそありがとうございます」

あ……そう言えば……。

「あの、海空さん？」

「はい、何でしょうか？」

「聞きたい事があるんですが……」

今まで、ちよつとゴタゴタしてたから忘れてたけど……海空さんなら知ってるかも？。

「はい、良いですよ」

「ありがとうございます。じゃあ、聞きたいのですが……」

よし、まずは一つ目。

「親父の転勤に……何故俺がついて行かなきゃ駄目なんですか？ 俺、親父の家とは別々に暮らしてるのに……」

そうだ、俺と親父は別々に暮らしてるんだ……それなのに無理矢理連れてくるとは……それに、親父も母さんも、俺が今通ってる学校に愛着あるのも知ってるのに……余程の理由があったのか？。

「……えーと……それは……」

海空さんは、答えるのを渋っている。

「あの……知らなかったら良いですよ！」

「いえ、知ってるんですが……知ってるんですが……」

……何だろう……どんな理由なんだ……。

「……ノ、ノリだそうです……」

「……………は？」

イマナンテ？

「……」

「……ノリ……だそうです……『転勤だし、ノリで光を連れてくか』って、言っていました……」

……せーの。

「はあああああああああああああああああああああ！
?!?」

ノリ！？ ノリだと！？ ウソだあ！！。

「ははは……輝樹さんらしいと言うか……」

親父らしい？ ……ははは……

「そうか……そうだったなあ……」

ははは……しばらく会ってないから、スッカリ忘れてたぜ……

「お父様よう……お前はそんな人間だったなあ……ノリで物事を決める人間だったなあ……フ、フフフ……クロス、コロシテヤル」

「あの……光くん？」

コロスコロスコロスコロスコロスコロ……あ。

「あ、すいません。ちょっとトリップしました」

「い、いえ」

とりあえず、親父は『ピー』を『ピー』にして、『ズキューン！』して、クロス。

「あ、まだ聞きたい事があるんですが……」 「はい、何でしょう？
よし、二つ目……。」

「あの……俺の学校はどうなるんですか？」

そうだ……俺の学校はどうなるんだ？ 転校するとしても、学校

……そう言えば……今何時なんだろう？ 俺は、ポケットから携帯を取り出し。

表示されてる時間を見てみた。

「げっ！ 十一時半!？」

うわー……まさかこんな時間とは……

「もう十一時半ですか……あ、お風呂に入っただけですか？ 疲れもとれますよ？」

「そうですね……あ、海空さんは？」

「私ですか……私はそろそろおいとまさせていただきます。明日は仕事なので……」

「あ、そうですね……今日は手伝っていただき、ありがとうございます！」

「いえいえ、では、私は帰ります……また『明日』お会いしましょう」

「あ、はい、それではー」

こうして、海空さんは帰っていった。

「……明日？」

どう言う意味だろう？ ……

「まあ良いか、風呂入ろう」

今日は疲れた……風呂に入ってゆったりのんびりほっこりしよう。

『ザバーン』

「あ……良い湯だな……あははん♪」
身体の疲れだとれるなあ……

「……学校は明日か……」

俺は、新しい学校の事を考えていた。

「はぁ……前の方がよかったなぁ……」

親父も知ってるはずなのに、俺が前の学校にどんだけ愛着あつか、一人暮らし始めたのも、前の学校に通う為だったに……。

「ふう……考えても無駄か……」

とりあえず、ポジティブに考えよう、冬魔もよく「何でもかんでも前向きに考えろ！」って言ってるしなぁ……。

「とりあえずポジティブだ、ポジティブに考えよう」

例えば……どんな奴がいるのか、どんな先生が居るのか、どんな部活があるのかとか。

「……うん、若干楽しみになってきた……」

さて……熱くなって来たし、そろそろ上がるか。

第5話 母と制服とカロリーバー

『ピリリリリ！ ピリリリリ！』

うーん……

『ピリリリリ！ ピリリリリ！』

……うるさい……

『プリリリン！ プリリリン！』

さっきからピリリ……リ？

『プリリリン！ プリリリン！』

「って、プリリリンって何！？」

俺は、起き上がって目覚まし時計にツツコンだ、何だこの目覚まし時計！？

『ただの目覚まし時計さ、ピリカラララ！ ピリカラララ！』

「もういいわ！」

『アラララ……』

俺は、チョップで目覚まし時計を止めた。

「ったく……何で朝からツツコマなきやならんだ……つか、こんな目覚まし時計あったっけ？」

ふと目覚まし時計に目をやると、目覚まし時計に紙が張っていた。

「……『おめでとう光、これは引っ越し祝いだ♪by父』……………」

俺は目覚まし時計を右手で掴み。

「こんなもん……」

振りかぶって。

「いるかあああああああああああああ……！！！」

おもいっきり床に叩きつけた。

『ガシャーン！！』

時計は、見事にぶっ壊れた。

「ったく……あのクソ親父め……なんて物寄越すんだよ……」

てか、何が悲しくて朝からツツコマないといけないんだ……。

「つーか……引っ越し祝い？」
ふと考えてみると。

「……ああ……俺引っ越したんだ……」
うう……寝ぼけてるな俺……。

「あー……とりあえず顔洗おう……」
こうして、俺は風呂場に向かった。

『ジャアアアアア』

「うわ！ 水つめてっ！」

やっぱこの時期だと水が冷たいな……顔洗いたくねえ……でも洗わなきゃダメだしなあ……よし。

「洗うか……」

俺は両手で水をくみ。

「おりゃ！」

その水で顔を洗った。

「つ、冷たっ！」

と、とりあえずもう洗わなくて良いか……冷たいし。

「えーと……タオルタオルっ」と

俺は、横に掛けてあったタオルで顔を拭いた。

「よし、完了！」

そのまま、歯を洗おうとした時、俺は目の前の鏡に目を止めた。

「……っかし……どんだけ女顔なんだよ……」

俺の容姿は、女性みたいな顔立ちだ、髪は普通の髪型で、髪の色

は母さん譲りの黒だが、目は女性みたいにはっきりした二重、背も普通の男と比べたら少し低い、声も男に比べたら高い、体は女性と同じぐらいスラッとしている。……はぁ……もうちょっと親父に似たかったなぁ……なんで俺、母さんと似なんだよ……。

「……鬱になってきた……」

……とりあえず歯でも磨くか……はぁ……

歯を磨き終わった後、俺はあることに気づいた。

「……朝ご飯どうしよう……」

そう、今この家には食べる物がないだ……カレーは昨日全部食べたし……。

「しょうがない……ここら辺にあるかわからないけど、コンビニで買うか……」

見つからなかったら朝ご飯抜きか……き、キツイな……絶対見つけよう。

俺はそう心に誓った。

「さて……そろそろ制服に着替えるか……どんな制服なんだろう？」
昨日、疲れてたから見てないんだよなぁ……確かりビングに置きっぱなしだったな……。

「とりあえずリビング行くか……」

俺は、リビングに向かった。

「確か机の上だっけ？」

そう言いながら、俺はリビングのドアを開けた。するとそこには……。

「……すう……すう……」

……あれ？ ソファーの上で誰か寝てる？

俺は、ソファーの上を見てみた。するとそこには……

「なんきよくへ行きたいかー……すう……すう……」

服装は白い半袖に黒いコートを羽織り、青いジーンズ履いた服装。そして、百人居れば百人は振り返るぐらいに整っている容姿、腰まで伸びた長い黒髪、雲のように白い肌、高い背、抜群のスタイルで、だいたい二十台前半ぐらいの女性が眠っていた……って、この人は……。

「母さん!？」

「すう……すう……寒いからいや……」

な、なんで母さんがここに……確か、この前手紙で、今南極にいるって……それと、帰ってくるのって、後二ヶ月って書いてたし……と、とりあえず起こすか……。

「か、母さくん……」

『ユサユサ』

肩を揺すってみた。

「ん……地震……机の下……」

しかし起きない。ならば……

「シチュー出来てるよー、あつつあつのコンクリームシチューが」

「んん……し……ちゅー？ ……シチューー！！」

シチューと言ったら、母さんは飛び起きた。

「……って、あれ？ 私は一体……」

寝ぼけてるな……まあ、いいか。

「おはよう母さん、んで、久しぶり」

すると母さんは。

「ん……」

右手で目を擦り。

「ふわぁ……」

左手で口を押さえ、欠伸をして。

「……」

俺の方を見てきた、すると、寝ぼけている母さんの目は徐々に見開き。

「光、久しぶりー！」

俺におもいきり抱きつこうとしてきた。しかし俺は。

「よっと」

「あれ？」

俺は体を右に反らしてかわした。

「もー、酷いじゃない光、母の愛をかわすなんて……この親不孝者！」

母さんは、俺に指を指しながら言った。……このテンション……懐かしい……。

「母さんは悲しいよ……」

よよよ……そんな感じで母さんはその場で泣き崩れた……うん、この嘘泣きも懐かしい……。

「まあ、とりあえず母さんのおふざけはスルーしてっと、お帰り母さん」

すると母さんは泣き真似を止め。

「うん、たっだいまー」

笑顔で言ってきた。……うん、この切り替えの早さも懐かしい……

…まあ、それもおいといてっ。

「いやー……母さんと合うのって半年ぶりだなあ……」

「そうねー……あ、そうだ光」

「？　なに母さん？」

「えーと……確かここにいれたっけ……」

そう言うと、母さんは何処からか取り出したカバンの中をあさはじめた。

「えーと……あ、あったあった！　はい光！　今回のお土産！」

母さんが俺にくれたのは、いつもお土産でくれる、母さん作の絵だ。

「お、ありがとう母さん！」

「ふふふ……今回は南極の絵だけど……今まで送った絵の中で最高の出来よ……ふっ、自分の才能が怖いわあ……」

母さんは、ニヤニヤしながら言った……母さんがここまで言う事は……よっぽどの出来なんだな……よし、後でリビングに飾ろう。

………そういえば……母さん帰ってくるの、手紙に書いてたのより早かったなあ……よし、何で早かったか聞いてみるか。

「なあ、母さん？　ちよっと聞いて良い？」

「？　なになに？　おかーさんに何でも聞きたまえ」

「いや、ちよっと気になったんだけど、母さんが帰ってくるのって、手紙に書いてたのと違って、早かったなあ……って、思っただけ」
すると母さんは。

「いやー、引越したんだから新しい家とか見とかないとなー……それに、輝樹は勝手に新しい家を決めたしね……ふふふ……私との相談無しに決めるとは……いい度胸じゃない……ふふふ……」

母さんは、悪魔のような笑いを浮かべながら言った。

「な、なるほど……とりあえず、二人がかりで親父を血祭りにする？」

俺もたぶん、悪魔のような笑いを浮かべながら言った、すると母さんは。

「まー……とりあえず、このマンション広いし綺麗だし……とりあえず、骨二、三本ね」

二、三本か……とりあえずあばら辺りかな？。

「……てか、なんか忘れてるような……」

なんだっけ？ 何か忘れてるような……俺がそう考えていると……。

「？ どうしたの光？」

俺が何かを考えてる事に気づいたのか、母さんに話し掛けられた。

「いや……なんか忘れてるような……」

「忘れてる？」

「うん、なんか忘れてる気が……」

うーん……なんだっけ……。

「まあ、忘れるぐらいだから大した事じゃないか」

俺はそう納得した、すると母さんがこう言った。

「まあ、そうね……てか光？ あんた学校は？」

………あ。

「それだあああああああああああああああ……！！！」

な、なんでこの事忘れてるんだ俺！？。

「……」

母さんは、ジト目で俺を見た。

「ちょー！ 俺をそんな目で見ないで！ てか、早く制服に着替えないと！」

俺は机の上にある、制服が入っている紙袋を手に取り。紙袋の中から制服を取り出した。

「お、黒ブレザーだ……って、言ってる場合じゃねえ！」

早く着替えないと！ そう思った時だった。

「手伝おうか？」

母さんが、手をワキワキさせながら言ってきた。

「……………はい？」

「いや、だから着替えを手伝おうかなーと、思って」

ナニッテンノコノヒト？。

「い、いい！ 自分で着替えるから！」

俺は全力で断った、しかし……。

「まあまあ、そう遠慮しない」

母さんは、俺の肩をガッチリ掴んだ。

「遠慮してないから！ 嫌な予感しかないからいらん!!」

逃げないと駄目だ！ 逃げないと駄目だ！ 逃げないと駄目だ！
けど、肩を掴まれてるから逃げられない！。

「ふっふっふ……私相手に嫌がつてるのって……逆効果よ♪」

……………あ。

「そ、そうだった！ 母さんはドS——って、いやあああああ
あああああああああ!!!!」

「……………」

……燃え尽きた……真っ白にな……。

「いやー、良い声で泣いたなあ……」

こ、このドSは……。

「さて……そろそろ行かないと遅刻するよ？」

母さんは、時計を指差しながら言った。

「……い、行ってきます……」

そう言っ、俺は参考書やら筆箱が入っているカバンを駆けた……
っ、疲れた……学校行く前にこんなに疲れるなんて……そう思い
ながら、俺は外に出ようとした、しかし。

「あ、ちょっと待って」

母さんに呼び止められた。

「……………なに？」

「はいこれ」

母さんはそう言って、俺に何かを投げた。

「……カロリーバー？」

カロリーバー、それは朝ご飯を食べる余裕がない人が、好んで食べる物である。ちなみに、味は百種類ある。このカロリーバーは…：醤油ラーメン味だ…：うわぁ…：朝から重いな…：。

「てか、何でカロリーバーを俺に？」

「いやー、光のお腹のへっこみ具合から、朝ご飯食べてないんだろなー。って思っ、カロリーバーを」

な、なるほど…：…と言うか、腹のへっこみ具合でわかるとは…：まぁ、いっか。

「ありがと母さん」

「良いつて事さ！」

母さんは、親指を突き立てて言った。

「んじゃ、そろそろ言ってきます！」

カロリーバーは、行く途中に食べよう。そう思っ、外に出ようした、しかし。

「あ、そう言えば光？」

またまた母さんに呼び止められた。

「なに母さん？」

てか、そろそろ行かないとヤバい！ 転校初日から遅刻なんて冗談じゃない！。

「いや、『闇』とは仲良くやってるなかーって思っ」

……………げっ！。

「え、えーと……」

「？」

ま、マズイ…：…この前、闇と大喧嘩したんだよなあ…：。

「う、うん、仲良くやってる」

すると母さんは…：。

「……怪しいなあ……」

疑うような目付きで俺を見た。

「え、えーと……あ！ そろそろヤバいから行ってくる！ じゃあ！」

俺は、やっと外に出る事が出来た。

「あ！ 待ちなさい光！」

母さんが何か言ってるけど無視だ！。

「じゃ！ 行ってきます！！」

こうして、俺は学校に向かった。

第6話 出会いと自己紹介と学校

新しい朝、新しい町、新しい景色、新しい道路、新しい商店街、そして、今向かっている新しい学校。そんな新しい物だらけの中、俺は――。

「……………迷った」

お、おもいつきり道に迷った……。

「……………学校の場所ぐらい聞いとけばよかった……………」

そう、俺は誰からも学校の場所を聞いてない…………ど、どんだけうつかり者なんだよ…………。

『アーホーアーホー』

……………か、カラスにまで…………。

「……………はあ……………どうしよう……………」

とりあえず俺は今、一軒家の並ぶ住宅街にある、どこかの家の塀にもたれて、カロリーバーを食べている。

「うん……………美味しい」

さて……………本当にどうしよう……………親父なら知ってるかな？ 電話して聞いてみるか……………そう思い、俺はポケットから携帯取り出して、親父に電話を掛けようとした、しかし。

「えーと……………親父の番号は……………あれ？」

親父の番号がない？ 何で？。

「……………あ」

お、思い出した！ 確か昨日寝る前に…………。

「さて……そろそろ寝るか……」
そう言って、俺はベッドに入った。

「……にしても……親父ムカつくなあ……」
ポジティブに考えても、ムカつく物はムカつく、どうしてもやろうか……あ、そうだ。

「地味だけど、親父の電話番号とメアド消すか……」

ついでに、登録外着信拒否とにして……っと。

「よし、消えた消えた。……さて、寝るか……」
こうして、俺は眠りについた。

「クソ……バカな事やったなあ……」

どうしよう……母さんに電話……いや、さっきの事があるからなあ……そう思った時だった。

「なあ？　そこでなにやってんの？」
何処からか、声が聞こえてきた。

「……誰？」

そう言って、周りを見てみると……。

「ここやここ、じゃあ母さん、行ってくるわ」

「気をつけるんだよ！　あんたツツコミ以外取り柄ないんやから！」
「大きなお世話や！」

俺がもたれ掛かっていた塀の家から、背は普通、体型も普通で、ボサボサ頭の茶髪、そして、優しそうな目をした。見た感じ俺と同じ年ぐらいの男が出てきた。

「あ、すいません」

俺は、その男に謝って、もたれ掛かってる塀から離れた。

「いや、別に気にせんでええよ」

男は、特に気にする様子もなく言った。

「そうですか……じゃあ、俺はこれで」

そう言っ、俺はその場を離れようとした……しかし。

「……なあ？　ちよつと聞いていい？」

俺は呼び止められた。

「はい？」

なんだろう？　……てか、早く学校行かないと……転校初日から遅刻なんてシャレにならない……。

「いや、その制服……」

制服？。

「もしかして、うちの学校の生徒なん？」

男は、そう言っ、自分の服と、俺の制服を指差して言っ……つて。

「俺と同じ制服！？」

「あはははは！！　な、なんやそれ！　あはははは！！」

「わ、笑うな！」

とりあえず、俺は男に、転校して来た事と、道に迷った事を話した、すると男は腹を抱えて笑いだした。

「す、すまんすまん……肝心な場所聞いてないやんて……プツ！

あはははは！」

「絶対悪いと思っ、てないだろ！！」

さ……流石にここまで笑う事はないだろ……。

「あー、笑った笑った……」

男は、笑い終わった後、俺の方を見てこう言った。

「とりあえずついてきい、学校まで案内すんで？」

「ま、マジでか!？」

「本気と書いてマジや」 た、助かった……。

「んじや行くで、……ええーつと……あんた名前は？」

あ、まだ名前言ってなかったか。

「あ、日野光って言います。こんな顔だけど、俺は男ですからね」
そう言う男は……。

「へえ、男なんや、俺は嵐野直人^{あらしの なおと}って名前や、嵐野のでも、直人でも、好きなように呼んでくれたらええよ、よろしくな光」

……あれ？。

「あの……」

「? どうしたんや？」

もしかしたら信じてないのか? この反応はあまりにもおかしい。
とりあえず、もう一回言っとう。

「もう一回言いますが、俺は男ですよ?」

「ああ、わかってるで」

……まさか、まさか……。

「あの……本当に俺の事を男って思ってます？」

この反応はあまりにもおかしい、だって、初対面の人に俺が男と言うと『……は?』とか『はいいい!?!』とか『ウソ乙』とか『男の娘……ハア……ハア……』……って、最後のは思い出したくなかった、とにかく、この嵐野さんの反応は不自然なんだ、だって『へえ、男なんや』だぜ? めちゃくちゃおかしいじゃないか!!
と考えていると、

「本人がゆうてのならそうなんやろ?」

……マジ……で? 本当に俺を男と? そう考えると、

何だか涙が出そうになった。

「どうしたんや?」

「な、何でもないです!!」

「何もないんやったらええけど……ま、これからよろしくたのむで」
「はい! よろしく願います!」

自己紹介を済ませた後、俺は嵐野さんの案内で学校へ向かった……でも、初対面で男と信じてもらえるなんて……こんなに嬉しい事はないよ。

俺は今、嵐野さんの話を聞きながら、学校に向かっている。……嵐野さんの話では、凄くデカイ学校らしい。

「へえ、そんなにデカイ学校なんですか……」

「うん、ホンマでっかいで……確か東京ドーム……何個分やっけ?」

「そこは忘れたらダメじゃん!」

そこ忘れられたら、どんだけ広いかわからないじゃないか!。

「すまんすまん、……忘れる程デカイ学校やねん」 「は、はあ……」
そ、そんなにデカイ学校なのか……てか、そんなにデカイ学校なら……。

「……じゃあ、生徒もいっぱいいるんですか?」

俺は、素朴な疑問を尋ねてみた、すると嵐野さんは。

「……めっちゃくちやおるで……なんせ、一つ学年で十五クラスやからな……」 「じゅ、十五クラス!」

あ、ありえねー!。

「んで、一つクラスに代々、30〜40人ぐらいやから……軽く計

算して、1000人以上やな」

「せ、1000人以上!？」

こんな少子化の時代に!？ あ、ありえない……。

「……流石にそれはウソなんじゃあ……」

だって、ありえないし……。

「まあ、いったら嫌でもわかるで……嫌でもな」

い、嫌でも……。

「……そういえば、どんな人がいるんですか!」

とりあえず、俺は話をそらした。

ちなみに、この質問は結構重要だったりする。こうゆう風に事前に調べておけどんな奴がいるかわかるし。

「まともな人とかいると良いなあ……どうなんですか？ 嵐野さん？」

「……………」

しかし、嵐野さんは答えない。それどころか、立ち止まって震えだした……って。

「ど、どうしたんですか嵐野さん!？」

「は、ははは……」

わ、笑いだした!？。

「ちょ! だ、大丈夫ですか!？」

「だ、大丈夫や……」

そ、そんなくたばりそう声で言われても……。

「と、とりあえず学校行くで……もうすぐや……」

そう言っ、嵐野さんは歩きだした……な、なんだ、さっきまであった、新しい学校への楽しみと不安が、今じゃ不安しかないんだけど……。

「と、とりあえず、嵐野さんについて行こう……」

ふ、不安だー!！。

こうして、俺達は走り出した。

「ぜえ……ぜえ……あ、相変わらずデカイなあ……」

「はあ……はあ……な、なんてデカさ何だ……」

俺と嵐野さんは、なんとか校舎の前にたどり着いた。

「あ、後は教室行っただけや……」

「え、ええ……な、長かった……」

や、やっぱ最近、実家に居た時と比べて体なまってるなあ……それに、最近、鍛錬する時間があんまりなかったし……前なら、あの程度でも息は上がらなかった……かも。「……そういえば、光のクラスってどこなん？」

「……へ？」

……俺の……クラス？。

「わ、わからない……」

「あ、あちゃー……」

ど、どうしよう……。

「……とりあえず、そこで上履きに履き替えて、職員室行ったらどうや？ 校舎入って、右にまっすぐ行ったらあるで」

「な、なるほど！ じゃあ、行ってくる！」

俺は、カバンの中から上履きを取り出して、上履きに履き替えた、そして職員室に向かおうとした、しかし。

「あ、そうや光」

嵐野さんに、呼び止められた。

「えと、なんですか？」

なんだろう？。

「さっきから思ってたんやけど、別に敬語やなくてええよ」
「はい？」

「いや、なんか気い使われてるみたいでいややし」
「はぁ……」

じゃあ、お言葉に甘えて……。

「……サンキュー『直人』…… じゃ、またな！」
「おう！ またな！」

こうして、俺は職員室に向かった。

「ここが職員室か……」
とりあえず入ろう。

「し、失礼します」
俺は、職員室に入った、するとそこには……。

「あ、来ましたか光くん。遅刻ギリギリですよ」
整った容姿、そして白髪がちらほら目立つ髪、そして、見た目二十歳な……。

「……え？」
「ちょ、え？ だってこの人……。」

「？ どうかしましたか光くん？」

「う……う……」
「う？」

そう、そこにいたのは……。

「海空さん!？」

そう、親父の知り合いの海空さんがいた。

「ええ、私は海空鳴海ですが……あ、言ってませんでしたっけ？」

私は、この学校の先生で、光くんの担任の、海空鳴海です」

……ま、マジすか……。

第7話 ドキッ！ それは予想外の再会！

「……………」

「あの……光君？」

「……………はっ！」

「す、すいません、ちょっとトリップしてました」

あぶないあぶない、どっかに旅立つところだった。

「そ、そうですか……」

「……と言うか。」

「ま、まさか海空さんが先生だったとは……」

あ、昨日のまた明日って言うのはこういう意味だったのか。

「……………もしかして、私が教師だと言う事は、輝樹さんは言っていないんですか？」

「……………それ以前に。」

「……………海空さんの事はおろか、学校の場所すら言ってませんでしたよあのクソ親父！！ おかげで道に迷うはカラスにバカにされるは……………」

あのクソ親父……………今度会ったら殴り倒す……………。

「……………うーん……………おかしいですね……………」

俺の言葉を聞いて、海空さんは手を組んで何かを考え出した。

「おかしい……………ですか？」

「ええ、実は昨日、家に帰った後、確認したい事があって輝樹さんに電話したんですよ」

「親父にですか？」

「はい、あの人昔から少し抜けてるところがありましてね……………」

ああ……………確かに抜けてるところあるよなあ……………思い出したらキリがない。

「そこで聞いたんですよ『光くんは学校の場所を教えてるんですか？』って、そしたら『あ、いっけね、言い忘れた、今電話したら怒

りのあまり電話切られそーだから、明日の朝電話すっか、教えてくれてありがとう鳴海!』って言ったんですけど……」

……………」

「うーん、電話するの忘れたんでしょか?」

……………」よし、落ち着いて考えよう。

『問題、親父は俺に電話した、しかし電話は鳴ってない、何故でしょう?』

『答え、俺が親父の電話番号を消して、登録外着信拒否にしたから』

「……謎は……解けた」

……自業自得と言うことか……。

「? どうしたんですか?」

「じ、実は……」

「そ、そうだったんですか……」

「は、ははは……」

と、とりあえず、後で母さんから親父の電話番号聞くか……あ、メアドも消したから聞かないと。

「……さて、もう時間が……そろそろ教室に行きましょか」

「そ、そうですね……」

こうして、俺達は 教室に向かった。

「にしても……」

職員室の前にあったエレベーター（普段は使っちゃ駄目らしいけど、今回は時間がやばいから乗っていいことに）を待ちながら、俺はこう言った。

「この学校デカイですね……普通じゃあり得ない大きさだ……」

うん、本当にデカイ、廊下は長い、校庭はバカデカイ、学校に入った時に見えた体育館も東京ドーム……何個の広さ、そして校舎もめっちゃくちゃデカイ、更に言うところ、さっきの職員室も、かなり大きかった……生徒が1000人以上いるからかな？

「まあ、この学校は普通じゃないですからね」

……普通じゃない？

「……えーと、生徒が1000人以上いるからですか？」

まあ、1000人以上生徒がいたら普通じゃないよな。

「まあ、それもありますけど……って、なんで生徒が1000人以上という事を知ってるんですか？ 確か何も知らないんですよね？」

そう言うところ、海空さんは頭に『？』マークを浮かべた。

「え？ ああ、直人から聞いたんですよ」

すると海空さんは、頭に更に『？』マークを浮かべてこう言った。
「え？ 嵐野くんの事を知ってるんですか？」

「ええ、今日会ったばかりですけどね、道に迷ってるところを助けてもらったんですよ」

もし直人に会ってなかったら100%遅刻……してたろうなあ……
……こんど会ったらお礼言わないと。

「ああ、そうだったんですか」

そう言っていると、海空さんの頭から『?』マークが消えた……さつきから気になってたんだけど、あの『?』マークって一体……。

……幻覚? 俺疲れてんのかなあ……それか、昨日頭を何回も打ったからかな? いっぱい血が出たからなあ……。

……あれ? そう言えば昨日……。

「あの……海空さん? ちょっと聞きたい事があるんですけど……」
「? なんです——あ、エレベーターが来ましたよ」

海空さんがそう言っていると、『チーン♪』という音が鳴って、エレベーターのドアが開いた。

「では、乗りましょうか」

「あ、はい」

俺と海空さんはエレベーターに乗って、海空さんが、『2』と書かれたボタンと『閉』と書かれたボタンを押した。

するとドアが閉まり、『ゴウンゴウン』と言う音と共に動き出した。

「さて……なんででしょうか? 何か聞きたい事があるんですよ?」

海空さんはそう言っていると、また頭に『?』マークを浮かべて、俺の方を見た。

……うん、半透明だから幻覚だ。

「いや、俺昨日頭から大量の血を流して、気絶しましたよね?」

「ああ、そういえば……あの、大丈夫ですか? 傷口は塞がりましたか?」

そう言っていると、海空さんは心配するような表情で俺を見た。

「ええ、傷口は一日で結構塞がりました、それにバンソーコー貼ってますんで」

うん、もう痛くないし大丈夫大丈夫。

「そうですか……よかったですね」

いやあ、よかったよかった。

「それで、あの後目が覚めた時、頭がめちゃくちゃ痛かったから、

救急車呼ぼうとしましたよね？」

「ええ、たしか凄いで叫んでもましたね」

いやあ……本当に痛かったなあ……。

「はい、それから海空さんが入ってきて……で、ここから質問なんですけど……あの時、海空さん俺に何かしませんでしたか？」

うん、あの時確かに何かされた、だって、何かされた後、すぐに痛みが無くなったし……。

すると、海空さんは……。

「……さあ？ 気のせいじゃないですか？」

横を向いて、露骨に目をそらした。

……怪しい……。

「いや、気のせいじゃないですよ、だって頭に何か刺された気がしますし」

すると海空さんは「ぐっ！」と言って「いえいえ、気のせいですよ」と言った……怪しすぎる。

「いやでも——」

俺が更にツツコもうとしたその時。

『チーン♪』

という音が鳴り、エレベーターのドアが開いた。

「あ、二階に着きましたよ」

そう言うと、海空さんはエレベーターから降りた。

「……」

これは……聞いても無駄？。

「では、教室に行きましょうか」

そう言うと、海空さんは歩きだした……。

「と、とりあえず着いて行こう……」

ま、まあ、気のせいかもしれないしな！ ……気のせいじゃない気がするけど、気にしない、気にしない！。

画面から100メートル離れて見てね！ b y影理）（離れ過ぎ！
b y光）

「ここが、光くんの教室です」

「ここが……」

俺と海空さんは、『1―2』と書かれて教室の前で立ち止まった。

……うう……緊張してきた……。

「では、私が呼んだら入ってきてくださいね」 そう言うと、海空さんは教室に入っていた……うん、さっきの事は忘れよう。

触らぬ何とかに祟り無しと。

……さて、そんな事を考えていると、教室から海空さんの声と、教室の中に居る生徒の声が聞こえてきた。

『はい皆さん、席に着いてください――』

『さあ忍ちゃん！ これを着るのよ！』

『い・や・で・す！！ て言うか、いい加減にしてください恵さん！ 私にそんな趣味はありません！』

『嫌な事ぐらい問題じゃないわ！ 似合いそうだからよ！』

『問題ありますよ！ それより、なんでそんな物が私に似合うんですか！』

『なんで似合うかって？ それはね、忍ちゃんのその短めの髪とか、Aより小さいむ――』

『きゃあー！ な、なんて事を言うんですか！』

『だって、なんで似合うのかって聞いたじゃない……』

『言っって良い事と悪い事がありますよ！』

……ど、どうなってんだ……？ 教室の中……。

えーと……、ちょっと整理しよう。

忍さんって人が、恵さんって人に何かを着せようとしてる↓忍さんって人は着るのを嫌がる、そして何で自分に着せようとするのか

を聞く↓そして恵さんって人が理由を述べる↓忍さん大騒ぎ（今ここ）。

「……なるほど、理解……出来るか!」

俺が自分の言葉にツツコンでいると、教室から、海空さんの声が聞こえてきた。

『……相原さん……貴女は何をやってるんですか?』

『あ! 先生! 助けてください!』

『あ、先生、いえ、ただのかん……げふんげふん、ただのふれあいです。悪いですか?』

『はあ……とりあえず、室町さんを離して、早く席に着いてください。後、その手に持つてる服を何処かに直してください』

『は……い……恵ちゃん! 必ず貴女をこちら側に目覚めさせてみせるからね!』

『永遠に目覚めません!』

……とりあえず解決した? ……つーか……一体何があったんだ?。

そう考えていると、またまた教室から海空さんの声が聞こえてきた。

『こほん、えー、知ってる人も居ると思いますが、今日からこのクラスに、新しいお友達が来る事になりました』 へー、知ってる人も居るか……そう考えていると。

『はい! 先生! 質問です!』

『はい、なんですか相原さん?』

おお、これは漫画やアニメで良く見る、先生に転校生の事を聞くやつだ、一体何を聞かれるんだろう? てか、質問してるのって、さっきの恵さんって人だよなあ……。

『転校生は男ですか? 女ですか?』

おお、マンガやアニメやゲームでよく見る普通の質問だ。

そう考えていると、その質問に海空さんは、

『男ですよ』

と答えた、ま、当然俺は男だから答えはあってんだけど、そう考
えていると。

『なーんだ、男か』

恵さんって人の、残念そうな声が聞こえてきた、……何でだろ？
そう考えていると、またまた教室から声が聞こえてきた。

『質問ありまーす』

『はい、なんですか雑項くん』

お、次は雑項さんって人か、声からして男だな……なんだろう？
雑項さんって人は、もの凄く影が薄そうな気がする……なんだろ
う？。

『転校生が来たって事は、今日の授業は昼までなんですよね？』

『ええ、その通りです』

？ 転校生が来たら昼まで？ ……どーゆう意味だろ？ そう言
う校則なのかな？ そう考えていると、教室から、

『では、そろそろ入ってきてください』

き、きた！ よし、落ち着け、落ち着け俺、まずは深呼吸だ！。

「すう……はあ……すう……はあ」

ふう……ちよつとは落ち着いた……よし、入るぞ！。

「し、失礼しまーす」

そう言っ、俺は教室に入った。

「では、黒板の前に来てください」

「は、はい！」

し、視線を感じる……落ち着け、落ち着け俺、この前、セーブデ
ータのコピーはしたはず……って、今それ関係ねえ……
ヤバイ、緊張し過ぎでわけがわからなくなってきた……落ち着くん
だ俺！ そう考えている間に、俺は黒板の前に立っていた。

「では、自己紹介をお願いします」

「は、はい！ えーと……皆さんどうもはじめまして、俺は日野光
って言います、最初に言っときますが、俺は男ですからね！ ……
コホン、親の都合で、今日からこの学校に通う事になりました、こ

れからよろしくお願いします!!」

よし! 噛まずに言えた! 昔みたいに、『お願いしましゅ!』
って噛まなくてよかったあ……。

「はい、皆さん仲良くしてくださいね、日野くんに何か質問がある人は居ませんか?」

あれ? いつの間にか呼び方が、光くんから日野くんに替わって
る……何でだろ……はっ! なんか一昔前の電波が……そんな
事を考えていると、

『はい!!』

教室にいるほとんどの人が手を上げた……気がする。いや、緊張
してあんま前見てないからわからないけど。

「では……」

海空さんが誰を指そうか悩んでいると、

「どっから来たの!?!」 「本当は男じゃないですよね!?!」 「誕生
日は!?!」 「血液型は!?!」 「結婚しよう!?!」 「本当は女性です
よね!?!」 「先生と日野くんの嘘つき!?!」 「……しかし、彼が本
当に男なら……くっくく……」

海空さんを見捨て、俺への質問が始まった……むう……色々質
問されてけど、なんか色々な声と混ざりあって聞こえなかったなあ
……けど、なんか失礼な質問された気がする……なんとなくだけど。
「皆さん、落ち着いてください。そんなに一度に質問されると、日
野くんが困りますよ?」

うん、流石先生、かなり困ります。そう考えていると、教室にい
る人達が、

『アイ、サー!!』

と言った、確か、了解しましたって意味だっけ?

「では……雑項くん」

「はい!」

あ、さっきの転校生が……って質問してた人だ……見た感じ……凄
い……凄いイケメン何だけど……何かが薄そうな気がする……そう

いえば、本当に何なんだろう？ 転校生が来たら昼まで……そう言う校風なのかな？ 前の高校も、みよーな校風あったし……まあ、後で考えよう、それより、何を聞かれるんだろう？。

「日野さんは本当に男なんですか？」

『プチ（切れてはいけない血管が切れかけてる音）』

「お、男ですよ」

俺は出来る限り笑顔を作って、普通に答えたが、おそらく、俺の笑顔はかなりひきつってただろう。

「ふう……ウソついていいのは4月1日の正午までですよ」

『プチプチ（切れてはいけない血管が切れかけてる音）』

「ウソじゃないですよ！ 前の学校の生徒手帳にも書いてますよ！」

そう言って、俺は持っていたカバンから、前の学校の生徒手帳を差し出した、すると……。

「……偽装？」

「次回、『カゲリの旅 ザ ビューティフル ワールド最終回、』
絆を取り戻す国』をお楽しみに!!」
「もうツツコミ所満載だあ!!」

第9話 血と黒子とちびっこ先生？

「……あ」

俺が投げた参考書は、ブーメランのように回転しながら、雑項さんの頭に参考書の角が突き刺さった……テヘツ、殺っちゃった☆……じゃなくて！！

「だ、大丈夫ですか!？」

すると雑項さんは、なんてことない口調でこう言った。

「ふっふっふ……僕がこの程度で死ぬわ——」

何かを言いかけたところで、雑項さんの頭に刺さった参考書がポロリと落ち、刺さっていた所から大量の血が流れだした——って「全く持って大丈夫じゃねえ!! 血がいっぱい出てるじゃないですか!」

すると雑項さんは、頭から流れ出ている血を右手で触り、自分の血を手につけ、自分の右手を見た、すると雑項さんは、ふっ、と鼻で笑い、なんてことない表情（血であんまり顔見えないけど、俺にはそうみえた）でこう言った。

「くっくく……この程度、昨日の隕石と比べればどうという事な——」

また何かを言いかけた所で、雑項さんはその場で倒れた——って

「きゅ、きゅ〇とくん……じゃなくて! 救急車!」

鞆から携帯（doco製品）を取り出して、救急車を呼ぼうとした、しかしその時。

「……失礼する」

教室に、黒い着物着て、右目以外の顔の部分を黒い布で巻いて隠している。真っ黒い怪しい奴が入ってきた。

「……………」

……え? 何? 何なのあれ? 黒子? 俺がそんな事を考えて

いると、真っ黒い奴は一瞬で雑項さんの隣に移動していた。

「なっ！」

速い！ そう思っていると、そいつは一瞬で雑項の頭に包帯を巻き、周りに飛び散った血を全て拭き取った。

「……………失礼する」

するとそいつは、雑項さんを肩に抱えて、教室から出て行った。

「……………」

あまりの速さに、俺は言葉失った。

「な、何だったんだ今の……………」

そう呟いた瞬間、俺の鞆が少し重くなった。

「な、なんだ！？」

カバンを開いて中を見てみた、するとそこには、さっき俺が投げた参考書が、新品並に綺麗になって入っていた。

「……………」

沈黙、と言うか言葉が出ない。

「……………なにいまの？」

ようやく絞り出した言葉は、俺の気持ち全てを表していた。

「…………コホン、他に質問がある人は手を上げてください」

さっきからずっと黙っていた海空さんが、何事もなかったかのよう言った。

「いやいやいや！！ こんな状況で質問なんて——」

『はい！！』

「——あるんかい！！」

何！？ 何なの！？ 俺がおかしいの！？

「では…………相原さん、どうぞ」

「はい」

「いやいやいや！ おかしいでしょう！ 今あんな事があったばかりでしょ！？ 質問なんかしてる場合じゃないでしょう！」

普通、救急車とか警察とか…………あ、やっぱ最後なし。俺パクられたくないし。

「まあまあ、細かい事は気にしない気にしない」

俺のツツコミに、相原さんは口の端を釣り上げ、楽しげな笑みを浮かべてそう返した。

「細かいくないし！ 気にするし！ と言うかなんで楽しそうなんだ！？」

なんか……もう……いろいろおかしいだろ！？

「別に細かいし、気になくて良いのに……楽しそうなのは、日野くんのその新鮮な反応が面白くて」

「面白いってなんですか！？ てか話が全然進まねえ！」

「……まあ、気にしない気にしない。雑項も（多分）大丈夫だし、話を進めたいなら私に質問させてくれれば進むよ（うな気がする）」

「は、はあ……」

これは……ツツコンでも無駄か？ 諦めろって事か、そういえば、昔誰かが言ってたなあ……人間諦めが肝心だって。

「てなわけで質問！ 日野君は何処の高校から来たの？」

「えっと……私立幽来高校です」

幽来高校。名前以外は至って普通の高校かもしれないと言われて
いる高校である。

「ふーん……わかった、私の質問はこれで終わりっ」と

相原さんがそう言った瞬間、またまた教室中の人達が「はい！！」
と言う声と共に手を上げた、しかし。

「えー、皆さん、そろそろ授業が始まるので、質問はまた後にして
ください」

さっきからずっと黙っていた海空さんがそう言った。

「えー」「まだ後一問一答ぐらい出来るじゃないか」「ケチー」「
くっ……俺の右腕が……っ！！」「厨二病乙」

教室から上がる避難の声 & amp; わけがわからない声、しかし
そんな声全て受け流し、海空さんはこう言った。

「では日野くん、あなたの席は……一番後ろの一番左側の席が開い
てますね、そこに座ってください」

「あ、はい、わかりました」

そう言って、俺は海空さんに言われた席に座った。

「……ふう」

やっと落ち着いた……そう考えていると、前の席から聞いた事がある声が聞こえてきた。

（おつかれさん、大丈夫か？）

誰だ？ そう思って前を見ると、そこには朝出会ったばかりのボサボサ茶髪の直人がいた。

（直人！？ え？ まさか一緒のクラス？）

（そうやで、まっ、これからよろしく！）

直人と小声で話していると、海空さんの声が聞こえてきた。

「はい、では皆さん、仲良くしてくださいね、そろそろ一時間目が始まるので、勉強、頑張ってくださいね」

海空さんはそう言うのと、教室から出ていった。

……一時間目ってなんだろう？ そう考えていると、俺はクラスの人達に囲まれていた。

「本当に男！？」「幽来ってあの幽来！？」「復旧にどんだけ時間かかってんだー！！」「とつとと次話更新しろやー！！」

色んな声が混じって全然聞こえない。ど、どうしよう……そう考えていると、

『キーンコーンカーンコーン♪キーンコーンカーンコーン♪』

「おら、席に座れガキ共」

チャイムの音と共に、教室に誰かが入ってきた。

『ちっ！』

舌打ちが聞こえたと思うと、クラスの人達が自分の席に座り出した。

た、助かった……そう思いながら、俺は教室に入ってきた人に目を向けた、するとそこには……

「つたく、ギャーギャーギャーギャーやかましいんだよ、体罰してほしいかゴラァ？」

身長125センチぐらいで、だいたい小学校低学年ぐらいの、目付きがかなり悪い男の子が入って来た。

(……なあ直人、あれって一体……)

直人にそう小声で話かける。

(シッ、気にしない気にしない)

(いや気にするし)

そんな会話をしていると、前から小学生ぐらいの男の子の声が聞こえてきた。

「んじゃ、教科書86ページ……の前に」

何かを言いかけた所で、小学生くらいの子は俺の方を見て、こう言った。

「お前が日野光だな？ 俺はこの学校の国語担当の木下啓太だ」

「は、はあ……って国語担当？」

国語担当って事は先生？ はは、まさか、そんなわけないよな？

そう思いながら直人に目を向けた、すると直人は俺が考えている事がわかったのか、真剣な顔で小声でこう言った。

(そんなわけあって、ほんまに先生や)

……嘘ん？ いやいや、そんなわけない、そんな事あるはずがない。そう考えていると。

「ちなみに、だ、俺の見た目、身長にツツコムんじゃねーぞ？ こちら40越えたおっさんなんだからな」

木下さんが、そんなあり得ない事言った、いやいやいや、40越えてる？ ありえないだろ、流石に。

これならまだ、海外から来た某子供先生の方がまだ説得力あるぜ？

「流石にそれは――」

それはない、そう言いかけた所で、俺の頬に何かがかすった、そう思うと、後ろから「パン！！」と言う大きな破裂音に似た音が聴こえてきた、バツと後ろを振り返ると、そこには何やら白い残骸がそこら中に散らばっていた。

「な、なんじゃこりゃ！？」

思わずそうツツコムと、黒板の前辺りにいる木下さんが「日野」と呼んだ、黒板の方に振り向くと、そこにはチョークを構えて、ものの凄い殺気を放つ木下さんがいた。

「ツツコムな……って言ったよな？ 次は覚悟するんだな」

……OK、白い残骸の正体はわかった、そして俺は木下さん……いや、木下『先生』にツツコムのをやめようと思った。

「んじゃ、転校生とのふれあいも済んだ所で、教科書86——と、いきたい所だが、日野、お前教科書は持ってるのか？」

「教科書……ですか、まだ貰ってないです」

俺がそう言っていると、木下先生は直人の方を見てこう言った。

「嵐野、お前日野と知り合いだろ？ さっきばそぼそ喋ってたし。てなわけで日野のとなりに行って教科書を見せてやってくれ」

「はい」

直人はそう言っていると、俺の隣の席（誰も座ってない事から、隣も空いてる席だと思う）に移動した。

「よっし、じゃあ今度こそ、教科書86ページを開いてくれ」

そんなこんなで、俺がこの学校に来て初めて受ける授業が始まった。

ヒカスク通信局（前書き）

よし！ 月三回更新完了——やめて！ 石を投げないで！
来月からちゃんとしますから！ あ、最後あたりでお知らせが
あります。

ヒカスク通信局

「光と！」

「直人の！」

『ヒカスク通信局！』

「どーも、直人でーす」

「どうも、主人公の日野ひかーって、待て直人！ 何だこのコーナーは！？」

「これはただの話数かせ『バキューン！！』……げふんげふん、このヒカスク通信局とは、読者の皆様にもっとヒカスクを知ってもらう為に出来たコーナーや」

「今話数稼ぎって言いかけたよな？ そして作者に口止めされたよな？」

「まあまあ、細かい事は気にしたらアカンで」

「細かくねーし！！ ……つか、具体的に何やんの？」

「せやなあ……作者から渡された紙にはこう書いてんで」

「なになに……」

『このヒカスク通信局では、ネタバレにならない程度にキャラを紹

介したり、没になった設定等を公開します。後、質問が来たら、答えられる範囲で答えたりします。後、ちょっとしたオマケとか、今後のヒカスクの予定とかを書きます（ネタバレしない程度に）』

「へえ〜……で、今回は何すんだ？」

「今回は、『ヒカスクが出来るまで』や！」

「ふむふむ、全く興味ない。読者の皆様ー今すぐブラウザーバックで戻ってくださいーい」

「見て後悔しても責任は一切とれませーん」

「では、VTRスタート」

『余りにも書く意味がないのでカットしました。光達は観ているので、その間読者の皆様は美しい花を見ながら、「ラ〇ール様の賛美歌」を聴きながらお待ちください。ただ、どうしても気になる方は、足の上に猫を置いて、携帯もしくはノートに文章書いてる少年を思い浮かべてください。それで十分です』

「いやー、つまらなかった」

「ほんまやなく……こんなつまらん物見たの久しぶりや」

「とりあえず、ヒカスクは猫のおかげで出来てる事がわかった」

「猫は正義！」

「えーと、次はなんだ？」

「次は没設定やな」

「没か、例えば？」

「ここに書いてる設定では、没になった光は、お金大好きな不良やつて、ついでに妹がおったらしいで」

「今とはかなり設定違うな……俺不良じゃないし、妹いないし」

「お金が大好きは否定せんねんな」

「い、いや、好きってわけじゃ……」

「まあ、それは置いといて、最初は光と奴らのスクールライフって名前やなかったらしいで、設定もだいぶ違うし」

「へえ、初耳」

「ちなみにその名前と設定はどっかに書いてるらしいで」

「どっかって？」

「さあ？」

「さあ？　って……」

「まあまあ、気にしない気にしない、暇な人は探してみたらええで」

「いやここに書けよ！」

「まあまあ、興味ある人おらんから大丈夫やって」

「……で、次は？」

「これで終わりや」

「え、もう!？」

「まあ、初回やからな軽くな」

「はあ……」

「では、最後に作者から一言!」

えー、このヒカスク通信局は不定期に掲載していきますので、これからよろしく願います。

司会は今の所、光と直人ですが、本編が進んでキャラが増えてきたら毎回変わると思います。

そして、もしかしたら他作品からのゲストキャラもくるかも知れません。

「ゲストキャラ? 他作品って言ってもどうせ自キャラだろ?」

違う、他の作者様が書いた作品のキャラ。

「……は?」

実はもう5人ぐらいの作者様から許可もらってます。

「ウソ!？」

マジ、ちなみに、かなり意外なキャラが多いです。

「それって?」

それは見てのお楽しみ、ただかなり意外なキャラです。え? なんだヒカスク何かに出てんの? と思うと思います。 な

「へえ……それは楽しみだ」

では、作者でした。

「では、今回のヒカスク通信局はこれでおしまいです」

「それでは、直人と!」

「光でお送りしました!」

『この番組は、明るい未来を夢見る高校、混沌高校の提供でお送りしました』

ヒカスク通信局（後書き）

本当にマジですよ、他作品からゲストが来ますよ！。

ごめんなさい。感想は明日返します（汗）

そして来月からちゃんとやります……。。

第10話 ようやく物語が動きだした（前書き）

更新遅れてごめんなさい！

第10話　ようやく物語が動きだした

『キーンコーンカーンコーンキーンコーンコーンコーン』

「じゃ、今日はここまでだ」

ふう……疲れた、やっぱ授業は疲れる。

「日野、授業にはついてこれそうか？」

「え？　あ、はい」

うん、だいたい前高校とおんなじぐらいだから大丈夫だな。

「そうか」

そう言うと、木下先生は、ミカン箱の上から降りた……どうでもいい話、木下先生は背的に、黒板の上の方に文字を書けないので、授業中ずっとミカン箱（ローラー付き）の上に乗っていた。

俺はその姿を見て笑いかけたが、木下先生にチョーク（推定速度、200km）を投げられ、一気に笑いがぶっ飛んだ、ちなみにチョークは壁に当たって粉々になった。

「じゃ、また――あ、そうだそうだ」

教室から出ようとした木下先生は、何かを思い出したのか、再びミカン箱（ローラー付き）の上に乗って、黒板に何かを書き始めた、一体何を書いてるんだ？

そう考えていると、先生は書くのを止めて、俺達の方を見て、こう言った。

「ここに書いてるの、よく覚えとけよ？　じゃ、俺はこれで……あ、俺の相棒『ミカンZ二世』をどっかに直しといてくれ」

そう言うと、木下先生は出ていった……多分『ミカンZ二世』と言うのは、あのミカン箱（ローラー付き）だろう……ま、それは置いていて、とりあえず俺は黒板を見た、すると黒板にはこう書いていた。

『桜ヶ丘高校生徒会役員。大好評連載中！　（ロリも百合もあるよ！）』

たか気になって、立ち上がって、声が聞こえてきた方を見た、するとそこには……。

「あの……そんなに一度に質問したら、日野くんが困るんじゃないでしょうか？　せめて順番を決めて一人ずつ聞いた方が……」

綺麗な水色の髪の毛のショートヘア、パッチリ二重の優しそう目、スラッとしたスタイル、そして、標準と比べると、ちょっと背が低い、かわいい少女、いわゆる美少女が立っていた。

「……かわいい……」

って、何呟いてんだ俺！　……けど、確かにかわいいなあ……ただ、一言言うなら……胸が……Aより小さいぐらい……。

そんな事を考えていると、

「ふむ、確かに室町くんの言う通りだ」

俺の周りにいた一人の男が、納得した顔でそう言った……にして、変わった口調だな……つーか、室町くん？　確か、相原さんって人と何か言い合ってた人が室町って人だったような……。 「ふつ、ならば伝家の宝刀……いや、宝拳か？　……まあ、いいか、とりあえずジャンケンで決めよう！」

『おー！！！』

おお、物を決める時の定番ジャンケンか……つーか、なんで俺さつきから説明口調なんだ？。

『最初はグー！　ジャンケンー』

皆が手を出そうとしたその瞬間。

『キーンコーンカーンコーンキーンコーンカーンコーン』

「（ガラガラ）皆さん、席についてください」

教室に、紙袋を持った、20歳後半ぐらいの男性が入って来た。

「くっ……続きは、次の休み時間まで持ち越しだ」

変わった口調の人がそう言うのと、皆が席に座り出した。

「た、助かった……」　本当、授業様々だ、そう小言で呟いた、すると前から。

「お疲れさん」

と言う、逃走者、もとい直人の声と、

「だ、大丈夫ですか？」

さっきの可愛い女の子の声が聞こえて来た。

あれ？　なんでもの子の声が？　そう思い、前を向くと、そこには……

「話しやったら後で聞いたるから」

そう言って、手を合わせて自分の席に座っている直人と……

「た、大変そうでしたね」

さっきの美少女、もとい、室町さんが、直人の隣の席に座っていた。

「さ、さっきはありがとうございます！　室町さん！　……っか

直人、てめ、よくも逃げやがったな……」

俺がそう言っていると、室町さんは少し照れたような顔をして、

「いえいえ、困った時はお互い様って言うじゃないですか」

と、言った、直人は申し訳なさそうな顔をして、

「すまん……ちょっと大事な用があったんや……」

と、言った。

俺はふう、とため息をつき、直人を見てこう言った。

「わかったよ、許すから後でファントン奢ってくれよ、あつ、ちなみにオレンジな味な」

すると直人はニヤツと笑って、

「しゃーない、奢ったるわ」

と言った。

「ファントンは、この世界ではコーラと同じぐらいポピュラーな炭酸飲料です。味はオレンジ、グレープなど様々ありますが、亜種に、プルプルシェイカーと言う炭酸ゼリーがあったりしますよ」

急に、室町さんがファントンについて説明の説明を始めた。

「……ど、どうしたんですか？」

すると室町さんは、ニコツ笑って、

「見てる人達に向けた、ちょっとした考慮です」

と言った、ああ、要するに……。

「気にするな、って事ですネ」

「はい、そのとうりです」

よし、さっきの会話は速攻忘れよう、直人がツツコもうとしてるけどスルーしよう……あ、そういえば……。

「そういえば、室町さんって、その席に座ってたんですね」
すると室町さんは、

「ええ、そうですよ、どうしてですか？」 頭に「？」マークを浮かべてそう言った。

「いや、さっきはノートに写すのに集中してたんで、前に誰が座ってたか見てないんで」

すると室町さんの頭から「？」マークが消えて。

「ああ、そうなんですか」

と言った、そして、室町さんがそう言い終わった瞬間。

「はい、静かにしてください」

と言う、先生の声が聞こえて来た。

「えゝ転校生の日野くん……でしたっけ？」

「あ、はい、日野光です」

そう言うのと、先生は俺の所に来て、持って来た紙袋を俺に渡した。
「はい、海空先生からの預かり物です。とりあえず、これには君の教科書と、体操服が入ってます」

そう言うのと、先生は紙袋の中の物を一つ一つ出して、俺に見してくれた、ちなみに体操服は、ジャージだ……ちなみに俺はジャージが大好きだ、もう一度言おう、俺はジャージが大好きだ。

「まあ、こんな所ですかね……あ、そういえば、自己紹介はまだでしたね……」

すると先生は、こほんとせきをして、こう言った。

「僕は門松雅かどまつみやびと言って、現代社会を担当してます。これからよろしく願います」

「はい、よろしく願います！」

俺がそう言うと、先生は黒板の前に戻って、
「では、教科書の42ページを開いてください」
と言った。

それから時間は流れて。

『キーンコーンカーンコーンキーンコーンカーンコーン』

「ま、これで今日の授業は終りだ」

「お、終わったあゝ」

現代社会が終わって数時間後、英語の授業を受けて、やっと昼休
みになった、……いやゝ……休み時間は大変だった、休み時間の度
に質問されるけど、皆ジャンケンをせず一斉に質問してくるし、
その度室町さん、もしくは直人が間に入ってくれるけど、その間に
休み時間が終わって……の繰り返しだった、……本当に大変だった
……そんな事を考えていると、

『日野くん!!』

俺はまた、クラスの人達に囲まれていた……またあの質問攻めか
……しかし、俺の予想は当たらなかった。

『俺（僕）（私）達の部活に入らないかい!?!』

……部活?..

「どうだい海空、あの二人の息子の様子は」

「まあ、今まだ何とも……」

「ま、そりゃそうだ……ヒッヒッヒ……」

「どうしたんですか？ 『学園長』」

「なあに……これからどうなるか楽しみなだけさ」

「そうですか……『私達』の時も、そうやって笑ってたんですか？」

「さあ？ 何の事やら？」

「はあ……まあ良いです。それでは、私はこれで……」

「ああ、また用があれば呼ぶよ……ヒッヒッヒ……」

第10話 ようやく物語が動きだした（後書き）

いや、授業受けてる部分を飛ばしたのにはわけが……書くの面倒くさいとかじゃないですよ！（え

後、多作の名前出てますが、正体不明さんからはちゃんと許可を貰いましたし、水月さんからは好きに使って良いと言うありがたいお言葉を頂きましたから大丈夫……なはず（え

感想返しは、明日には必ず……ちゃんと死に生きのも返します！

第11話 サブタイって必要なんですかね? (前書き)

一日遅れてごめんなさい!

第11話 サブタイって必要なんですかね？

「……部活？」

何でいきなり部活の話になるんだろう？ 昼休みだから、また質問攻めかと思ったんだけど……つーか、普通そう言うのって、もうちょっと学校に馴れてからじゃね？ そう考えていると、

「それは！ この学校は今日明日は昼まで&この学校では、部活に絶対入らなければならぬからさ！」

教室の入口の方から、聞き覚えのある声が聞こえてきた……あれ？ 心読まれた？ つーか、誰だ？ そう思って、入口の方を見た。

「ふっふっふ……雑項^{ざつこう}吉良^{きら}！ ただいま復活！」

するとそこには、頭に包帯を巻いてる……凄く……凄くイケメン何だけど……何かが凄く薄そうな奴がいた……あれ？ 本当に誰だっけ？ ……つーか、周りの人も『誰だっけ？』って顔をしてるな……。

「皆、その『こいつ誰だっけ？』って顔をやめてくれないか？ 特に日野くん、人のデコに本を投げという僕を忘れるとは……この人でなし！！！」

……あ、思い出した、他の人達も、『あ、思い出した』って顔してる。

「……す、すいませんでした！！！！！」

俺は、土下座しようと思ったが、周りの人がいっぱい居て出来なかったから、頭を下げた、すると……。

「ふっ……僕は全然気にしないさ、これぐらいなんくるないさー！」

何故に沖縄弁？ とにかく、無事でよかった……そういえば、

「さっきの言ってた、部活に入らなければ、って言ってましたが、それってどうゆう意味ですか？」

俺がそう言うと、雑項さんは、

「説明しましよー」

たぶん、『説明しましよ』って言いかけたその時。

「この学校は、校則で、生徒は絶対部活に入らないといけないからさ」

周りにいた、変わった口調の男が、雑項さんの台詞をさえぎって、説明を始めた。

へー、変わった校則だなく、俺がそう考えていると、

「ちよつとちよつと、半井さん。なからい僕の台詞兼出番を盗らないでくださいよ」

雑項さんが、半井さんと言う人に、若干怒った口調でそう言った。すると半井さんは

「ふっ……世の中早い者勝ちなのだよ、それに、話もちゃちゃつと進めたいのだよ」

と言った、すると雑項さんは

「ちっ……話を進めたいのなら仕方ない……けど、次やったら覚えておいてくださいよ？」

「ふっ……望む所だ」

うわあ……お互い、凄い殺気を出しあってる……現代高校が出すもんじゃないな、うん。

「と言うわけで日野くん！ 早速私達の部に入らないか！」

半井さんがそう言うのと、

『ちよつと待てよ半井』『日野は俺達の部だ』『いや、私達の部よ

！』と言うと声が、周りから聞こえてきた。

「えーと……」

どうすりゃいいんだろう？ 第一、半井さんの部が何か知らないし……と言うか他の部も何か知らないし……あ、そうだ、直人か室町さんに聞けばいいや、そう思って、俺は直人と室町さんの席を見た、すると……。

『がんばれb v直人』

『少しの間我慢してください。室町』

と書かれた書き置きがあった。

(逃げやがったなああああ!!!!)

なんてこった! 直人はともかく室町さんまで逃げるなんて!。

そんな事を考えていると。

「こい! 日野くん!」

半井さんが俺の腕を思いっきり掴んで走りだした……って

「ええええええええええ!!!!!!!!!!」

なになになに!!? どうなってんの!!?

『半井を追えー!!!』『日野を捕らえろー!!!』

そう言って、クラスの連中は俺と半井さんを追いかけてきた。

「って、俺を捕らえる!!?」

つーか何だよこの状況!!? 教えてゴッド!!!。

「な、半井さん!!! これは一体全体どうゆう事だ!」

俺がそう言っていると、半井さんは

「後で説明する!!!」

と言って、走るスピードを上げた……ってか。

「腕がめっちゃくちゃ痛いんですけどおおおおおお!!! 痛い

痛い!!! 離せ!!!」

そりゃ、腕だけ引っ張られて連れ回されたら痛いに決まってる!!!

「うるさいなあ……」

俺が痛みに喚いていると、半井さんはそう言った。

「うるさくもなるわあ!!! お前もこの痛みを体験してみろ!!!」

俺がそう言っていると、半井さんは『ふう』とため息をついて、こう言った。

「仕方ない……少し眠ってくれ」

すると、半井さんは俺の口に何かを無理矢理ねじ込んだ。

オェ! マズ! つーか飲み込んだしまった!。

するとその瞬間。

「あ……れ?」

視界が……歪む……意識が……だんだん……遠くなる……やばい……落ちる……。

『お……ろ』

……

『……き……ひ……ん』

うーん……

『おき……ひ……くん』

うるさいなあ……

『起きろ……日野くん』

後2分……

『起きろ！ 日野くん！』

……っーか、誰の声だ？ そう思って、俺は目を開けた、するとそこには……

「ふう……やっと起きたか」

『セーラー服』を着た、俺と同じ年ぐらいの『男』が居た。

「……………え？」

『男』が『セーラー服』？ ……………。

「ぎやあああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああ！……！！！！！！ へ、へ、へ、変態だあああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああ！……！！！！！！」

け、携帯携帯!! ケーサツに通報しないと!! たしか104
だっけ!??

「落ち着け日野くん、私だ」

……………あれ? 何処かで聞いた事がある声なような……………俺は、
変態の顔をよく見た、すると……………

「半井……………さん?」

半井さんだった、セーラー服を着た半井さんだった……………って。

「何でそんな服着てるんだよ!? つーか、あの時俺に何飲ませた
んだ!!」

そうだ、あの時、俺は半井さん……………いや、この変態野郎に何かを
飲まされた、それで気を失って……………

「おお、この服は我が部の正装だ、そして、君に飲ましたのは薬師
寺特製睡眠薬だ」

「睡眠薬!? なんでそんな——って、正装?」

部の正装? なんじゃそりゃ?

「おお、そうか、君は私達の部を知らないのか」

「え、ええ、今日転校生してきたばかりですし……………」

「なら、実物を見た方が早いな……………カモン! 我が同士よ!」

そう言っ、半井さんがパチンと指を鳴らすと

『呼んだか! 我らのソウルメイトよ!』

何処からか、セーラー服、もしくはドレスを来た『男』が、7人
ぐらい現れた。

「……………」

……………」

俺、フリーズ。

「何、転校生に私達の部について説明しようと思ってな、だから君
達に来てもらったのさ」

『こいつが転校生……………男……………なのか?』

「ああ、彼は男だ」

『へ……………なら、こいつは良い逸材だ、よし、任せろ晶!』

「はぁ……はぁ……」

走り出して何分たっただろう？ 中のシャツが汗でびしょびしょだ。

「振り切った……か？」

そう呟いて、俺は後ろを見た、けど、そこには誰も居なかった。

「……ふう……」

俺は、その場にへたれこんだ。

「……っーか、ここ……何処だ？」

学校……なのは分かる。

けど、無我夢中で走ったからなあ……。

「……っーか、なんだったんだよあれ……」

変態……なのは分かる。けど、女装部……って一体……そんな事を考えていると……。

「あれ？ 日野だよな？ 今日転校生してきた」

誰かに話しかけられた。

「えーと……はい、そうですけど？」

誰だろう？ そう思っ、俺はその人の顔を見た、するとそこには……

「そのようすだと……あの変態どもから逃げてきたんだな？」

腰まで届く銀髪の髪を持ち、胸の辺りに『発』と書いている白い白衣を着た、俺と同じ年ぐらいの男がいた。

第12話 回想終了（前書き）

やっと更新出来た……

第12話 回想終了

「えー……つと……」

誰だっけ？ 向こうは俺を知ってるみたいだけど……。

「……こいつ誰だっけ？ って思ってるな？」

「そ、そんな事ないです！ えーつと……確か……」

つーか、また心読まれた！？

「ごまかしても無駄だ、俺は誤魔化せても、俺のウソワカール君7号は誤魔化せない」

そう言っていると、白衣を着た人は胸からゲー○ボー○みたいな物を取り出した。

「ウソワカール……？」

何だろう、むちゃくちゃ胡散臭い。

「……まあ、おんなじクラスだけど自己紹介してないから知らなくてどうなんだ」

……は？

「じゃあ、知らなくて当然じゃないですか！」

「まあ、そりゃそうだ」

「そりゃそうだって……はあ……」

つ、疲れる……今日は本当に疲れる……。

「つーか、大丈夫か？ すっげー疲れてるみたいなんだけど？」

「ええ……疲れてますよ……」

……つーか、さっきの変態は何だったんだろう、夢？ ……とり

あえず頬っぺたをつねってみるか。

「（ギュー）……痛い……」

とりあえず夢ではないのがわかった、夢であって欲しかったのに。
「所で日野、邪魔だからそこ退いてくれないか？ そこに座られてたら部屋に入れんし」

部屋？ そう思って、俺は後ろを見た、するとそこには、「発」

と大きく書かれた扉があった。

「あ、すいません、今退きま——」

そう言って立ち上がるうとした所で、急に体がフラついて、壁に寄りかかる形で立ち上がった。

「あ、あれ？」

どうしたんだろうか？ まさかさっき全力で走りまくったから足が限界突破した？ ……そこまでヤワな体な覚えはないんだけど…。

「おい、大丈夫か？」

そんな俺の様子を見て、白衣を着た人は心配そうな表情でそう言った。

「あ、はい……でも何か体がフラついて……」

と言うと、白衣の人はその場で何かを考え始めた。

「……よかったら休憩していくか？ 汗だくだし、タオルで拭いた方がよくないか？」

その言葉を聞いて、俺はちょっと考えた。

どうしよう？ 確かに汗は拭きたいしちょっといろいろ考えたいし休憩もしたい。けど……この人は普通の人なんだろうか？ さっきの変態共の事もあるし……俺を部屋に誘い込んで何かしようと企んでいる可能性もある。

どうするか……そう考えていると。

「日野は何処だー！！」「何としても捕らえろー！！」「捕まえてスクミズ&p;メイド服を着せるんだー！！」

遠くの方から、聞き覚えがある声が聞こえてきた。

「……今は悩むよりここに隠れた方がよくないか？」

「よろしくお願いします！」

何かあったら、その時はその時だ！

……この時俺はテンパってて気付かなかった、俺が「よろしくお願いします」と言った時、白衣の人が邪悪な笑みを浮かべた事に――

「ふいふ……水美味しいですね、これ本当に水道水ですか？」

「ああ、正しくは「昨日のジョー水君マークIIZ」で浄水された水道水だな」

大体30分ぐらい経っただろうか？ 俺は「発明部」の部室でくつろいでいた。

「しっかし……」

と呟いて周りを見る。周りには、至る所に訳がわからない機械やそれをいじくっている人、それと部屋の真ん中付近に置かれたカプセルみたいな形をした大きな機械が置かれていた。

「まさしく発明……って感じですね」

「そりゃ、発明部だからな」

そう返した白衣の人、もとい夏楽明人かがくめいとさんも何やら見たこともない機械をいじくっていた。

「で、夏楽さんの話を纏めると……」

えーと……夏楽さんから聞いた話を纏めると……

「この学校は色んな部活があって、あの女装も部活動……って事です
ね」

てか、纏めると言っても、今言った事しか言っていないからなあ……

「ああーそんなかんじそんなかんじ」

……俺が何かを質問しても、何か機械をいじくってて今みたいに
適当に返す事もあるし……。

「さて……と」

これからどうしよう？　ぶっちゃけ夏楽さんは当てになりそうにないし……。

「……そうだ」

直人と室町さんを見つけて話を聞けば良いじゃないか、あの二人なら何か知ってるかもしれないし……。

「……よし」

思い立ったが即行動、俺は立ち上がり、夏楽さんにお礼を言った。
「水とタオル、ありがとうございます。では、俺はこれで……」
と言って部屋から出ようとした時。

「待つんだ、日野」

と言う夏楽さんの声が聞こえて来て、俺は立ち止まった。

「？　何ですか？」

俺がそう言うと、夏楽さんはさっきまでいじくってた機械を俺に手渡してこう言った。

「このボタンを押してくれないか？」

夏楽さんは、機械についている赤いボタンを指差して言った。

「へ？　何ですか？　自分で押せば良いじゃないですか」

「良いから良いから」

……何だろう。嫌な予感がする……けど水貰ったりしたからなあ……。

「はあ……わかりました」

そう言って、俺はボタンを押した、すると、急に俺の体が光に包まれた。

「！？」

なんだこれ！？　か、体が動かない！？　そう思って所で、俺を包んでいた光は一瞬で消えた……な、なんだ今は？　そう思っていた所で、俺は自分の服装に目がいった。

「……………は？」

……俺の目が間違っていなければ、俺は今、『メイド服』を身に

まどつていた。

「なんじゃこりあああああああ！！！！！」

何！？ 一体何なの！？ 何でメイド服！？ てか服は！？

「よし！！ 成功だ！」

混乱していると、目の前で夏楽さんがガッツポーズをし、喜びの
声が聞こえてきた。

「夏楽さん！！ こ、こ、こ、これは！？」

夏楽さんは、嬉しそうな笑みを浮かべながら答えた。

「ああ、これは『着せ替え君プロタイプ』ポロリはあるかも」と
言って、ボタンを押す事によって、この機械の中に入っているミ
クロ単位まで分解された服がなんやかんやで再構築され、一瞬で服
を着替える事が出来るんだ」

「なんだそのあり得ない超技術！？ てか何でメイド服！？」

「まあ、決定はまだあるけど……例えば再構築に失敗して服がな
くなって全裸になったり……あ、メイド服なのはノリだ」

「それでもすげえ！ てかノリかよ！」

「イエス。ノリだ」

そう言って、愉快そうに笑みを浮かべる夏楽さん。

「……とりあえず、何故俺なんですか、後俺の学生服！！」

すると夏楽さんは、「んー」と言っておかを考えた後、こう答えた。

「いやあ……みんな実験台になるの嫌がって、どうすっかなーと思
ってた所で日野を見つけて、あ、こいつなら実験台に良いかも。っ
て思ってた今に至る。ちなみに服はその機械の中、もっかいボタン押
せば元に戻るはず」

「実験台！？」

「ああ、初めて見た時から、実験台に向いてる。って電波を受信し
たんだ」

「電波かい！！」

……な、なんか疲れてきた……あれか、ツツコミ過ぎると「ツツ

コミ性疲労」になるって言うのは本当だったのか、今まで信じてなくてごめん、親父。

「……で、このボタンを押せば戻るのか？」

俺の問いに、夏楽さん……いや、もうこいつに敬語は使わない。もう呼び捨てで良いな。

夏楽は、自信たっぷりに答えた。

「ああ、戻るはずだ」

その言葉を聞くと、俺は機械のボタンを押した。

すると俺はまた光に包まれた、と思った所で、光は消え、俺の服は元の学生服に戻っていた。

「あーもったいない。色んな意味で」

色んな意味ってどうゆう意味だよ、そうツツコもうと思ったけどやめた、もうしんどい、疲れた。

「……失礼します」

……とりあえず、とりあえず直人と室町さんを探そう……。

「あ、待て日野」

また俺を引き留める夏楽。一体なんだよ……。

「……なんだよ？」

すると夏楽は、笑顔を浮かべてこう言った。

「実験台として、この部に入らないか？」

「……………は？」

「ふっふっふ、実験台としての入部をする奴が少なくてなあ……で、転入して来たばかりでこの学校について右も左もわからない日野を強制的に入部させようと思ってな」

頼んでもない説明をした後、夏楽は何処からか取り出した怪しげな機械を大量に取り出した。

……とりあえず、俺がとるべき行動は一つだ。

「お断りだあああああああああああああ！！！」

俺は扉を一気に開け、発明部から飛び出し、逃げ出した。

「あ、待て!! 行きますよ部長! 命果^{めいか}!! そして+α共!」
「はあゝ……今年の一年は元気良いねえ……ま、部長としてはありがたいけど」

「はいよ明人! 絶対捕まえるわよ!!」

『誰が+α共だ!!』

後ろから声が聞こえるけど、無視だ!!

で、さっきと似たような状況を何回か繰り返して……。

『まああああああえてええええええええええええええええ!!!!』

第8話冒頭に戻る。

「……………」

とりあえず、もう一回叫ぼう。

「どうしてこうなったああああああああああああああああああああああああああああ!!!!!!」

第13話 常識人部（前書き）

どうも、お久しぶりです。

地震の被害凄いですよね……自分が何も出来ないのがもどかしいです。

一応募金とかはしたんですけど……。

っと、とりあえずどうぞ。

第13話 常識人部

「だりああああああああああああああああああ！！！！」

走る走る走る！！ 今の俺にはこれしかない！！

『待てええええええええええええええええええええええ！！！！』

後ろ声なんて無視だ！ 俺は走る！ 風になる！。

「あははははははっ！ 風が気持ち良いiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！」

……って、何壊れてんだよ俺！ 風が気持ち良いって何だよ！
そう心の中でツツコンだ所で、廊下を右に曲がった。

だがそこは……

「げっ！！」

行き止まりであつた、行き止まり以外の何物でもなかった。

「ど、どうしようどうしようどうしよう！！」

パニックに陥っていると、

『ふっふっふ……追い詰めたぞ！ 日野！』

後ろから聞こえてくる多数の人間の声、言うまでもなく、さつきから俺を追いかけているこの学校の生徒……もとい、変態&mp, 変人達である。

「うう……」

どうする俺、何か手は無いのか。

A、行き止まりの壁を砕く……いやダメだろ、常識的に考えて。

B、モップを振り回してあいづらを蹴散らす……無理だ、第一モップがないし、ヘタしたら俺捕まる。

……詰ん……だ？ いやいや、まだだ、まだあるはずだ！ と言うか今考えたA、Bって何だよ！ めちゃくちゃ過ぎるだろ！

いかん、俺はかなりテンパってるようだ、落ち着け……落ち着くんだ俺、COOL……そう、COOLになるんだ俺。何か打開策があるはずだ、それを考えるんだ。

C、話し合いで解決する……出来たらとづくにやってる。

D、大人しくあいつらが誘っている部活の内どれかに入る……嫌だ、ロクな部活が無かった。特に女装部や発明部何かは絶対嫌だ。

E、忍者みたいに壁を走って逃げる。

「これだあ！」

何と言う素晴らしいアイデア、自分で自分が恐ろしい……っ！

『……？』

『何だあいつ？ 急に大きな声を出して』

『もしかして……ちよつと痛い人？』

『うわあ……マジかよ』

『もしくは壊れたとか』

『あー……ずっと走りっぱなしで壊れたのか』

『何か走ってた時色々叫んでたしなあ……「起きろ闇！ お願いだから起きてください」とか「企画小説の筆が進みません」とか』

『後……「死にたがりと生きたがりとは何だったのか」とかな』

あいつらが何か言ってるけど無視だ！ 俺は走る！ 壁を走る！

忍者に出来て俺に出来ないわけがない！ そんな事を考えていると、あいつらがいる所から、サッカーボール程の大きさをした、丸い球状の何かが飛んで来て、俺の目の前に落ちた。

色は黒、そして球状の何かからは、パチパチ音を出しながら燃えている。導火線らしき物が出ていた。

その姿はまるで漫画に出てくるような爆弾———

『……………え？』

俺を含めた、この場に居る全員が間抜けな声を上げた。

……え？ 何？ 何これ？ そう考えている間に、導火線は燃え

尽き———

『プシュウウウウウウウ！……！』

球状らしき何かから、白い大量の煙が出始めた。

『な、何じゃこりやああああああああああ！……！』

俺を含めた全員が大きな声を上げる。

だから何？ 何なんだよ一体！

『ゲホッ！ ゲホッ！』

煙たっ！ 何これ煙たっ！ ……本当に何なんだよ一体！ 一体全体どうなってんだよ！ そう考えていると、

『ガシッ』

俺の右手が何者かに捕まれた。

「！！」

ヤバい！ 捕まった！ そう理解した瞬間、俺は右手を振り回して、相手の手を振りほどこうとした、だが、振り回そうとした瞬間。

「日野さん！ 大丈夫ですか！」

相手の方から、少し聞き覚えのある声が聞こえて来た。

こ、この声は……

「ゲホッ！ ゴホッ！ む、室町さん！？」

煙で相手がどんなのかは見えないが、この声は確かに室町さんだ！

『ゲホッ！ ガハッ！ 室町だと！』

『ゲホッホッホ！ あのまな板だと！？』

『ゲボロッ！ ゴッホ！ あのAカップ……いや、—Aカップだと

！？』

『ゲフンゲフン！ あの一部に熱狂的なファンがいる室町だと！』

……何だろう、あいつらの方からとんでもない会話が聞こえて来たような……

「……半井さん、夏楽さん、薬師丸さん、その他大勢の皆さん……後で殴ります」

何だろう、室町さんから凄まじい殺気を感じる。……そ、そんな事より！

「む、室まゲホッ！ 室町さん！ 一体何が——」

「話は後です！ 今はこの場を何とか切り抜けましょう！」

そう言って室町さんは俺の腕を引っ張り、煙からうつすら見えるあいつらの方に走り出した。

「ちょ！」

ヤバイヤバイ！ あそこを通り抜ける気か！ 無理だ！ そう考えていると、いきなり体が浮いたような感じがした。

「……え？」

浮い……てる？ いやいやまさか、じゃあこの浮遊感なんだ？ 地面を踏んでる感覚がないのは何だ？ そして下から聞こえてくる……

『ゲホッ！ クソッ！ 煙たい！』

『ゴホッ！ 窓を開けろ！ 換気だ換気！』

——— 奴らの声は何だ？

そう考えた所で、ドンと言う音がした、その音と同時に、足に痛みと衝撃を感じ、足が地面を踏んでいる感じに戻った。

「……は？」

何？ 一体何？ そう考えている間に、室町さんが俺の手を引っ張り走り出した。

「………」

まさかと思い後ろを見た、するとそこには……。

『よし！ 煙が晴れてきたぞ！』

『覚悟しろ日野おおおお！！！！ ……って、あれ？』

『い……ない？』

『な！ どういう事だ！』

さっきまで俺を追いかけていた奴らの姿だった———

「な、なんじゃこりやああああああああああ！！！！！」

何！？ 本当に何！？ マジで跳んだ！？ ウソン！？

「ちよちよちよ！ なんすか室町さんこれ！？ 何なのこれ！？」

「話しは後です！ 今は走ってください！」

そう言って走るスピードを上げる室町さん。

……どうしよう、嫌な予感がする。手を振り払って逃げるか？ でも室町さんだし……信用出来るかな？ 直人と一緒に普通っぽい……よし、とりあえずついて行こう。何かあったら、その時はその時だ！

そうして、俺は室町さんについて行った――

「ぜえ……ぜえ……」

「ふう……着きましたよ」

あれから数分後、俺と室町さんは「常識人部」と書かれた扉の前に居た。

常識人部……なんか良い響きだなあ……いや、惑わされるな、実際はどんなのかはわからない。

「とりあえず、入りましょうか」

「あ、はい」

室町さんはコンコンと扉を叩くと、

「私です。日野さんを連れて来ました」

と言った、すると扉の向こうから、

「よっし、入れ」

と聞こえて来た。

「では、どうぞ」

ガラガラと扉を開けると、大きな机と7つのパイプ椅子があった、そしてそのパイプ椅子の内3つに、三人の人影が座っていた。

まず一人は見覚えがあった、関西弁が特徴的で、ボサボサの茶髪に人懐っこい笑みを浮かべている、

「な、直人!？」

「よっ、光」

直人である。

「……………（ペコリ）」

後の二人は見覚えが無かった、一人は今俺にペコリと頭を下げた。

「あ、どうも」

それに釣られて、俺もペコリと頭を下げた。

……長い髪で顔が隠れているけど、着ている制服を見る限り女性だろうか。

「こいつが日野の息子か……………」

最後の一人は、ちよつと……………いや、かなりおかしい人だった。

まず何がおかしいかと言うと、見た目である。

年は大体三十歳ぐらいで、ソフトリーゼントの金髪。顎に生えている無精髭、そしてそこそこ高い背。

ここまで……………ここまでならまだ良い……………問題は着ている服である。

この人が着ている服はこの学校の『制服』である。

俺らの年代が着るなら問題はない。微塵もない。

ただ考えて欲しい、三十歳のおっさんが制服を着ている姿を。

……………ただの変態である。

「……………」

どうしよう、常識人部とか書いてるのに、いきなり常識人じゃないっぽい人が居ただけだ。

「まあ、とりあえず座り」 直人はそう言うと、空いているパイプ椅子を指差した。

「あ、ああ……………」

とりあえず俺は、直人の隣の椅子に座った。

……ツツコムべきだろうか？ そう考えていると、

「さて、ようこそ日野光君。歓迎しよう。我らが部活『常識人部』へ」

制服を着た三十歳ぐらいの人が喋りだした。

「は、はあ……………どうも」

とりあえず、普通の人何だろうか？ だって常識人部って書いて

るし……。

いや普通なら、三十歳ぐらいのおっさんが制服着てるわけないだろ。

そう考えていると、

「大丈夫か光？　かなりしんどそうやけど」

「あ、ああ……大丈夫だ」　……そういえば、走りっぱなしだからかなりしんどい。そう考えながら、ふと室町さんに目をやった。

「？　何ですか？」

……あんな走ったのに、汗一つかいてないし全然平気そうな顔をしている。

「い、いえ、何でもないです」

「あ、そうですか」

……な、何か悔しい……明日からジョギングしようかなあ……最近部活やらなんやらで鍛えるの忘れてたし。

そう心に決意していると、おっさんがまた喋り始めた。

「さて、日野、俺達に聞きたい事はないか？　この学校の様子を見ただろう」

「聞きたい事……ですか」

聞きたい事……山のようにいっぱいある。答えてくれそうだし、聞いてみるか。

「じゃあまずはい——」

あいつらが一体何なのか聞こうとすると、

「あいつらはただの生徒だ、ちよつと変わってるけどな」

俺が全部の台詞を言い切る前に、おっさんが質問に答えた。

「……は？」

え？　心読まれた？

「その様子だと……くくく、今回も当たったな」

そう言っつて、悪戯が成功した子供のような笑みを浮かべるおっさん。

「よ……読まれた？」

……な、なんじゃこりゃ！？　少し混乱していると、

「あー別に心読んだんちゃうみたいやで？」

と言う直人の声が聞こえて来た。

「じゃ、じゃあどうして……」

「いや、ここに最初に来た奴の言う質問ってほとんど「あいづらは一体何なんですか？」らしいねん。やから光が何を聞こうとしたのがわかってたんやと思う。……俺も室町もやられたしな」

「やられましたねえ……」

「な、なるほど……」

確かに、毎回同じ事聞かれたらわかるよなあ……そう納得していると、

「さて、まだ質問あるんだろ？　おっさんがジャンジャン答えてやろう」

質問……確かにまだまだある……。

「じゃあ、この学こ——」

「混沌学園、生徒の数が一万人以上と言う超巨大マンモス校だ、この学校には世界各地からスカウトされた生徒や、地元に住む生徒が通っている。ここまでは普通だ、だが普通の学校はかなり違う所がある。それは……」

「そ、それは……？」

って、また読まれた。

多分、さっきとおんなじ理由でわかったんだろう。もう気にしない、気にしたら負けだ（たぶん）。

「それはな……」

「それはな……？」

「それはそれはな……」

「それはそれはな……？」

「それはそれはそれはな……」

「それはそれはそれはな……って、どんだけ溜めるんですか」

俺がそう突っ込むとおっさんは「ははは」と楽しそうに笑った。

「いやすまんすまん、昔を思い出してついな……まあ、ぶっちゃけると、この学校は何故か変人や変態が集まる傾向があるんだよ」

「あんだけ貯めた割にスルツと言ったよこの人！」

あんだけ貯めたんだからもつとこう……何かあんだろ！

そう心の中で突っ込むと、俺は今の台詞に引っ掛かる所があるのに気づいた。

「変人や……変態？」

ははは、そんなわけ……

『女装部に入らないか！』

『発明部の実験台になってくれ！』

……あるな、うん。

「……って納得は出来たけどありえねー！！ 何だよ変人や変態が集まる学校って！！」

んな学校あるか！！ ……いや実際今あるけど！

「ホンマなんや光……」

「本当何ですよ……」

何処か悟りを開いたような目で俺を見る直人と室町さん。

「うう……わかったんだけど……認めたくねえ……」

何だよ！ 転校先が変人や変態が集まる学校って！ 何処のラノベ！？

「事実だ、諦めろ」

真剣な表情でおっさんが言う。

うう……認めるしかないのか……。

「で、理解して貰えた所で……次の質問言っちゃいなYO！」

おっさんは何故か語尾を妙に強めて言った。

次の質問ねえ……。

「じゃあ、あいつらからの勧誘を————」

「無理」

「即答！？」

またも言い切る前に答えられた。

ちなみにだが、俺は『あいつらの勧誘を止めさせる方法はない?』と言おうとした。

「……まあ、今よりだいぶ勧誘をマシにする方法はあるがな」

「ほ、本当ですか!」

そんな事が出来るのか! よし! さっさと実行だ!。

「本当だ、けどちよい大変だぞ?」

少し真剣な顔をしておっさんは言う。

「ええ! 望む所ですよ!」

あいつらから逃げる為なら、俺は悪^{ワル}にだってなってやる!

「……で、その方法は?」

「その方法は――」

少し間を置いた後、おっさんは大きな声でこう答えた。

「部活に入る事だ!」

第14話 説明（前書き）

久しぶりの更新です。最近リアルが忙しくてなかなか……それではどうぞ

第14話 説明

「……は？」

部活？ あの女装部とか発明部とか？ ……………。

「嫌だ！！」

あんな部活に入りたくねえ！ 人間としての尊厳を失いたくねえ！

「待て、話を最後まで聞け」

おっさんはやれやれと肩をすくめると、そのまま喋り始めた。

「いいか、誰も女装部や発明部に入れとは言ってない」

「……あ」

そういえばそうだ、誰も女装部や発明部に入れとは言ってない……ちよつと早とちりした。

「……でも、じゃあどんな部活に入れば良いんですか？ さっき追いかけて来た連中の部活ってほとんどまともじゃないですし……それに、部活に入った所で勧誘が無くなるとは思いませんし……」

入ったとしても無理矢理引き抜かれそうだし……いつそ殺るか？ 殺るかしかないのか？ 俺はそんな危ない事を考えていた。

「……お前、忘れっぽいのか？」

おっさんは、呆れたような顔をして失礼な事を言った。

「そんな事ないですけど」

「……やっぱり似てるな……」

少しムツとした口調で返すと、おっさんは小声で何かを言った、小さくて聞こえなかったけど、何言っただ？ そう考えていると、

「じゃあ、ここが何なのかわかるか？」

「……は？」

んなもん学校に決まってる。何故そんな当たり前の事を聞くんだろう？

あれか、やっぱ『常識人部』とか言って実は変人——

「……………あ」

「忘れっぽいって言われた理由がわかったか？」

「……………とても良くわかりました」

変な奴は実は俺でした。

……………は、恥ずかしっ！

「さて、日野が自分はなんと恥ずかしいクズ野郎と思った所で」

「いやそこまで思っていないです」

確かに恥ずかしいとは思ったけど。

「……………とりあえず、俺にこの部活に入れって言いたいんですね？」

「ああ、そのとうりだ」

なるほど……………確かにこの部活なら安全……………なのか？

「けど、さっきも言いましたけど入った所であいつらの勧誘が無くなるとは思えないんですけど……………」

「それに関しては大丈夫だ」

おっさんは自信満々と言う言葉が似合うような笑みを浮かべ言い切った。

「な、なんですか？」

「ふふふ……………それはなあ……………」

「そ、それは……………」

おっさんは少し間を置くと、立ち上がり、そのまま出口のドアの前まで移動した。

「え？ あの……………」

説明は？ そう聞こうと口を開こうとしたが、おっさんはそれより早く口を開いた。

「ちょっと用事があるから、後は直人に聞けばいい。じゃーな」

そう言い残すと、おっさんは部屋から出ていった。

「……………」

ここまでの俺の感想。『なんじゃこりゃ？』『どうなってる責任者出てこい』等である。

「えーと……………大丈夫か光？」

直人はそう言うのと、さっきまでおっさんが座っていた席に座り、俺と向き合う形になった。

「えーっと……何が何だが……と言うか何であのおっ——あの人はいきなり出ていったんだ？」

危ない危ない。思わずおっさんと言う所だった。

「うーん……多分準備やと思うけど……」

「準備？」

準備って何だ？ 歓迎会とか？ ……んなわけないか。

「まあ、すぐにわかるわ」

直人は、何やら意味ありげな事を言うと、ポケットから折り畳んでいる紙を取り出し、俺に手渡した。

「これは？」

そう良いながら紙を広げると、紙には『入部届』と書かれており、いくつか記入する所があった。

「まあ、見てのとうり入部届や、それ書いて顧問の海空先生に渡せばええ」

「なるほど……」

と言うか俺が入部するのは決定事項なのか。

「て言うか、さっきからずっと聞きたかったんだけどさあ……」

「ああ、入っても勧誘されへんか、やろ？」

「ああ」

本当、入っても無理やり引き抜かれそうなんだけどなあ……

「それに関しては大丈夫や」

そう言っ、直人は自信満々と言う表現が似合う笑みを浮かべた。

「何でだ？」

そう聞くと、直人は自信満々と言う表現が似合う笑みを崩さず話始めた。

「この学校にはな、『他の部活に入っている者を無理やり自分達の部活に引き込むべからず。これを破った者には………ふふふっ♪』って言う校則があるんや」

「ちよつと待とうか、何その『破った者は……』って無駄に長い沈黙は、てか最後何で笑ってるんだよ」

「ツツコムだけ無駄や、とだけ言っとくわ」

直人は、何処か悟りを開いたかの表情をしながら言った。

ああ……そうか、直人もツツコンだんだろうなあ……そしてツツコンでも無駄だとわかって言ったのだろう（たぶん）。

「とりあえず続けるで？」

「ああ、わかった」

「まあ、この校則は……わかりやすく言うと、他の部活に入ってる人間を無理やり自分達の部に引き抜いたりするな。って事やな」

「なるほど……」

部活に入っていれば無理やり引き抜いたりはされないのか……って、

「それってつまり、俺がこの常識人部に入っていれば女装部や科学部からの勧誘が無くなるって事か!？」

それなら俺は喜んでこの部活に入ろう！ とりあえず急いで入部届を書かないと！ そう思うと、俺は急いで持っていた鞆の中に入っているペンケースから黒のボールペンを取り出した。

「まあ、そうゆう事やな……ただ、勧誘が全く無くなるわけやないで？ 今よりかは遥かにマシになるけど」

「それでも良い！」

よし、書くぞ！ えーと……名前と緊急連絡先と趣味だな

「日野光……つと」

……本当、女っぽい名前だなあ……って、感傷に浸ってる場合じゃない。

連絡先は……とりあえず俺と母さんとじいちゃんとばーちゃんと親戚の人で良いな。

親父は……番号消したからわかんねえや。

うっし、次は趣味か……てか入部届に趣味って普通書くっけ？

……まあいいか、ここは無難にゲームと剣術と母さんの絵を見る

ことと絵を書くことって書いとくか。

「うっし、書けた！」

これで完璧だ！ そう思った所で、紙の右下に書いてある『印』と言う文字が目に入った。

「げっ……」

やべえ、印鑑なんか持ってねえぞ、どうする、どうするんだ俺！
「ん？ どうしたんや？」

「いや……これ……どうしよう？」 『印』と書かれている部分を指差し直人に見せると、

「こんな事もあるうかと……」

直人はそう言うのと、ポケットの中に手を突っ込み、

「バッチリ用意してるで！」

『日野』と書かれた印鑑を取り出した。

「なん……だと？」

な、何故印鑑がこんな所に！ 印鑑は普通に家にあるはずなのに！

「直人、何で印鑑がこんな所に……」

「いや、簡単な話や、この学校に購買あんねんな？ そこには食い物以外にもいろいろ置いてあって、印鑑も売ってんねん。んで、さっきの休み時間の間にこの印鑑を買ってきた……って事や」

「いやいや、何で購買に印鑑売ってるんだよ！」

普通無いだろ！ 何だよこの学校！

「まあ……この学校はいろいろ狂ってんねん。おかしいねん。気にしたら負けや」

直人は、何処か遠くを見るような目で答えた。

ぐ、ぐぐぐ……ツツコンだら負けなのか……？

「……と、とりあえず印鑑を貸してくれ……」

「ん、朱肉はそこにあるで」

「あいよ」

印鑑に朱肉をつけると、印鑑を紙に思いっきり押した。

「これで完成……か？」

そう呟いて、俺は直人に入部届を見せた。

「うっし、完璧や！　そうと決まれば……」

直人が何かを言おうとした所で、

『ここかぁ!!』

外から、聞きたくなかった変人達の声が聞こえてきた。

……………バッドタイミング過ぎんだろこれ!!。

第15話 大丈夫じゃない問題だ（前書き）

久しぶりの更新です。リアルが忙しくて……積み本消化とか（おい

第15話 大丈夫じゃない問題だ

声が聞こえてからの室町さんの行動は速かった、素早く扉の前に移動すると、扉の鍵を閉めた。

『おい！！ 開けろー！！』

その声と共に扉をドンドンと叩く音が聞こえてくる。

「これで……しばらくは安心です！」

室町さんはそう言ってガッツポーズをするが、俺は一つの疑問が頭に浮かんだ。

（あれ？ これ俺達閉じ込められたんじゃないかね？）

「なあ……」

「大丈夫や、問題ない」

俺が言葉を言い切る前に、直人が俺の言葉をさえぎり、どつかで聞いた事がある台詞を言った。

「それエ○シャー——」

「あかん言うな、それ以上先を言ったらあかん」

直人が真剣な顔で言ったので、ツツコムのを止めた。

「で、何か手はあるのか？」

「あるで！」

直人はそう言って、急にかがんで、床をペタペタと触りだした。

「……？」

何やってるんだろう？ そう考えていると、

「確かここを押したら……よっと！」

その声と共に直人が床を押すと、『ボコッ』と何やら説明するのが難しいわけがわからない音が聞こえてきた。

けして説明するのが面倒なわけでは無い、その辺りを勘違いしないように！ と考えながら音が聞こえた方を見ると、そこには縦の長さで横の長さが一メートル程の正方形型の穴が空いていた。

「なっ！ これは一体！」

まさか、直人が床を破壊したのか！？ 初みたいなみたいな奴だな……あ、ちなみに初と言うのは昔の知り合いだ。何時か登場する。「ビックリしたやろ？」

「ああ……まさか直人がこんなに力持ちだったとは……」

「ちやうちやう、この床、ある程度の力入れて押したら外れんねん」「なん……だと……」

そう言われて穴が空いた床を見てみる。

「……ホントだ、よく見たら外れてる」

穴を覗き込むと、今外れた床が下の部屋に落ちていた、下の部屋は見た感じ物置って感じた。

……と言うか……

「なあ、さっきの『ボコッ』って音は床が外れる音だよな？」

「ああ、そうやで」

「じゃあ、落ちる音はどうなったんだ？」

普通、あんな物が下に落ちたらかなり大きい音が聞こえるよな？ 俺の記憶が正しい限り、『ボコッ』って音以外何も聞いてないよなあ……。

「さあ？」

「さあ？ って何だよ……」

「まあ細かい事は気にすんなって事や」

「いや細かくねえから！」

普通何かが落ちたら『ドン！！』とか『チャリーン！！』とか言うだろう！

「それより、や」

直人は急に真剣な顔をして、穴が空いた床に指を指した。

「こっから外に出て、ひたすら走れば職員室に着くはずや、んで、入部届けを海空先生に渡せば……今日はもうこれで終わりや」

終わり——その言葉に俺は素早く反応した。

「本当……だよな？」

「ああ、ホンマや、届けさえ出したら、明日もまあ……色々あると

思うけど、とりあえず終わりや」

……もう、入部届けを出すしかねえんだろうなあ……それに入部届けを出せば勧誘も収まるらしいし……よし。

「わかったよ……てか出すしかないしな」

俺の言葉に、直人はニヤリと言う言葉が似合いそうな笑みを浮かべた。

「おっしや！ そうと決まればとっと出すで！」

そう言うと、直人は穴が空いた場所まで行くと、穴に向かって飛び降りた。その瞬間、穴からはドン！という直人が着地したであろう音が聞こえた。

……何で床が落ちた時は音がしなかったんだろう。ピ○ラットのな物が70ぐらいありそうな謎だ。

「ほら、行くで！」

俺も穴が空いた場所まで移動して、そこから飛び降りた。ドン！と言う音と共に足にちよつとした痛みを感じた。

……にしても本当、何でさっきは音しなかったんだ……ピカラ○ト70ぐらいの謎だな、本当に。

「室町と紅くれないも行くで！」

上に居る二人……と言うか、あの髪の長い人は紅って言うんだな。室町さんは穴から少し顔を出すと、少し困った表情をしていた。

「あの……少し向こうに向いて欲しいんですけど……」

そう言った室町さんは少し顔を赤くしていた。

まあ、そりゃ、室町さんと紅さんって人はスカート出しなあ……ちよつと残ね——いや全く残念じゃない！ 仕方ない事だ！

「？ 何でや？ はよ降りて行くで」

心から邪念を追い出していると、直人から何もわかっていない。と言う表現が似合う声が聞こえた。

「なっ！」

思わず声を出した、バカな！ 相手はスカートを履いてるんだぞ！
「いやそのお……」

室町は本当に困った表情を浮かべている。そりゃスカート履いてるだしなあ……そう考えていると、

「行こ……」

「え————きゃあああああああ！！！」

紅さんが室町さんの手を掴んで、穴から飛び降りた！！。

その瞬間、思わず目を反らす、……室町さんが白で……紅さんが黒……いやあれは気のせいだ！！ 俺の邪念が生み出した幻覚だ！！
またしても現れた邪念を追い払っていると、またもやドン！
と言う着地した音が聞こえてきた。

「う、ううう……」

「……？」

「ど、どうした室町？ 足でも捻ったか？」

直人は頭に疑問符を浮かべたような表情をして、紅さんはわけがわからない。と言った風に小首を傾げた。

「お、俺は何も見えてないですよ！」

とっさに室町さんにフォローを入れる。嘘も方便って言うしね！

「何言うとんねん」

直人が怪訝そうな表情を浮かべて俺に言った。

いや俺としてはお前が何言うとんねんって感じなんだが。

「ほ、本当に見てませんか……？」

「ええ、見てませんよ！ なっ！ 直人？」

顔を真っ赤に染めた室町さんの問いに、直人にアイコンタクトを送りながら答えた。

「？ 何をや？」

俺のアイコンタクトに気付かず、直人は疑問そうな表情を浮かべて答えた。

ちい！ やっぱ知り合ったばっかだと通じねえ！

「見てないよな？ なっ？」

直人に詰め寄りながら言うと、直人は少したじろいて答えた。

「い、いや、何の事かわからへんけど……たぶん何も見てないで？」

「そ、そうですか……」

室町さんは心底ホッとしたような表情を浮かべた。

……うん、やっぱ嘘も方便だな。そう考えた所で、俺は紅さんの存在に気付いた。

そういえば、紅さんは恥ずかしがる様子も無ければ見た？　とも

聞かない。疑問に思いながら紅さんの方に目を向けた。

「……………何？」

首を傾げ、いきなり目を向けた俺に疑問そうに言った。

「い、いや、何でもないです」

「……………そう」

むう、更に謎が……。

「つと、そろそろ行くで？」

「ん、わかった」

直人の言葉に反応し、俺達は扉の前まで移動した。

「ええか？　作戦内容はあいつらを振り切って、海空先生に入部届けを渡す事や」

「ああ、そういえば海空先生は何処に居るんだ？」

「たぶん今のぐらいの時間やったら職員室やな、後もいつこ言いたい事が……まあ、それは走りながらもええか」

なるほど、そう思いながら傾くと、俺は顔を叩き、気合いを入れた。

てかもう早く帰りたい。そして何より疲れた、今日どんだけ走ってるんだよ俺。

「よし、じゃあ行くで！」

その声と共に、がらがらと扉を開けた、さあ、今日最後の逃走劇の始まりだ！　と思った所で、開いた扉の向こうに居た、『人達』が目に入った。

女装してる男達、白衣を着た人達、それから——

『って、何で（おるねん！？）いる（んですか！？）んだよ！？』

俺、直人、室町さんのツツコムが見事にシンクロする。てかマジ

で何でだ!?

「いやまあ……」

俺達のツツコみに、女装をした一人の男が苦笑しながら答えた。
「あんたら上の部室で色々喋ってたろ? それが外まで思いっきり
聞こえてたから、あんたらが下に移動する事がわかって、待ち伏せ
してたんだが……」

『……………』

俺、直人、室町さん沈黙。……もっと小さい声で喋ればよかった
!!!。

「へ、へえ……そうなんや」

「ああ、そうだ……」

「は、ははは」

「……」

「……」

「……」

「じゃ、そういう事で」

そう言うのと、直人は扉を閉め、素早く鍵を閉めた。

「これで安心や!」

「いやどうやって逃げりゃ良いんだよ!!!」

どうすんだこれ!? 本当にヤバイぞこれ!?

「ふっふっふ……心配は無いで」

直人はそう小声で言うのと、部屋の真ん中辺りまで移動し、急にし
やがんで床を押した。

……まさか……ねえ? そう考えた所で、『ボコッ』と言うさっ
き聞いた音が聞こえた。おいおいおい……。

「実はまだ隠し通路があってやな……」

「流石にご都合主義するざるだろ!!!」

さっき入れた気合いが萎んで行くのを感じながら、逃走劇が幕を
開けた……。

第16話 DASHだ!! (前書き)

DASHと言えば、ロックマンDASHですよね……何故、
発売中止になった!! (今さら 3

第16話 DASHだ!!

「そんなわけで逃走劇が始まったんだが……」

「どんなわけやねん」

「そんなわけだ」

現在、直人、室町さんの二人が並んで走り、それに続く形で俺と紅さんの二人が走っている。

ははははっ！ 風が気持ちいいiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！！
……って、もう壊れてたまるかぁ！！

『居たぞ！！ 日野だ！！』

『待ちやがれええええええええええ！……！！』
「げえ！来たあ！！」

後ろを見ると、女装した（略）や白衣を着た（略）変態達が居た。

「つゝか何故だ！？一応隠し通路から逃げたのに！」

[illegible]

前回からヤバイ発言ばかりじゃないか！！
あんまりメタ発言とか
されたら逆に萎えるんだよ！！

「つて、そーいや直人！！ さっきもう一つ言いたい事があるつて言ってなかったか！？」

確か、さつき部室を出る前に言ってたな……ってか走りながら喋るのキツイ!!

「あ、ああ、それはやな——うおおおおおおおおお
 おお!?!?」

「きやあああああああああああああ！？！？」

直人が何かを言いかけた所で、前を走っていた直人と、室町さんが急に『消えた』

「な!？」

「…………消えた？」

立ち止まって周りを見る、何処だ、何処行った!? 「な、何ですかこれえ!?!」

「うわぁ! 気持ち悪!! 何やコレ!?!」

何処からか直人と室町さんの声がする。周りを見てみると、直人と室町さんが居なくなった辺りに、大きな穴が空いていた。

まさか……おそろおそろ穴を覗いてみる。するとそこには……

「ちょ、本当何なんですかこの緑色! 妙に身体にくつつくんですけど!」

「わかった! これスライムや! あの小学生の時に作ったゼリー状のアレや!」

緑色の何かが身体中に付着している直人と室町さんが、そこに居た。

「だ、大丈夫か!?!」

「な、何とか大丈夫や……」

「は、はい、何とか……」

ふう、良かった……けどどうする!? 今引き上げてたらあいつらに追い付かれる!! そう考えた所で、

「ちっ、タイミングを外したか!?!」

後ろからそんな声が聞こえた、振り返ると、変人達の中に居る見覚えのある奴が、ボタンのついた怪しい箱を抱えて走っていた。

あの見覚えのある白衣は……。

「夏楽!?!」

そう、あいつは科学部の夏楽だ! 俺を捕まえて実験台にしようとしてる奴だ!

てか、今の「ちっ、タイミングを外したか!?!」どういう意味だ!?! まさかこの落とし穴はアイツが仕掛けたのか!?!

「光行け!?! やないと捕まる!?!」

「行ってください日野さん! 本当に捕まりますよ!」
そんな直人と室町さんの声が聞こえる。

「で、でも……」

「でもクソもあるかあ!! 俺らなら大丈夫や!! 他に助けがおるから!!」

「ええ、だから早く行ってください!!」

うう……だけど……そう考えた所で、紅さんが俺の右手首を掴んだ。

「……行こう」

紅さんがボソツと言った瞬間、紅さんが俺の手を掴んで、走り出した。

「……………迷ってる時間は無い、早く行かないと捕まる」

淡々と言うと、紅さんは走るスピードを更に上げた、後ろを振り返ると、落とし穴がもう遠くの方にあった。

直人、室町さん……二人の犠牲は忘れない! そう決意し、俺達は職員室に向かった。

『待てええええええええええええええええええええええ!!!!!!』

後ろから聞こえる叫び声を聞き流しながら、俺と紅さんは走っていた。ちなみに腕はまだ掴まれている。

「……………」

「……………」

お互い無言、あれから一言喋っていない。……な、何か気まずい……そう考えながら、俺は紅さんの方を見ていた。

髪は長く、顔まで覆っていて顔は見えない。リ〇グで有名なあの人のようである。

胸の膨らみとスタイル、そして制服を見る限り女性だと思う。そして、一番特徴的なのは『髪の色』である。色は赤、真っ赤つかである。街中を歩けば皆からの注目を浴びるくらい派手な色だ。

赤い髪って珍しいなあ……そんな事を考えながら、紅さんの髪を凝視していた。

「……………何？」

髪を凝視していると、紅さんが振り返り、そう言った。

「え、いや、赤い髪って珍しいな……と思って」

「……………そう」

と言うと、紅さんは再び前を向いた。

「……………」

「……………」

そしてまた会話が止まりそうになる。

「か、髪染めてるんですか？」

とっさに会話を繋げる。だってこのままだと気まずいし！

「……違うはず、たぶん、地毛」

今度は振り返らずに紅さんは言う。違うはず？ たぶん？ どういう意味だ？

『夏楽アレだ！ アレを出せ！』

『今用意してる……！』

「はず、とか、たぶんってどうゆう意味なんですか？」
後ろから聞こえる雑音は受け流し、疑問を紅さんに訪ねる。

『よし！ 準備完了！』

『でかしたぞ夏楽！ 流石は科学部No.2！』

『ふっ、そう誉めるな半井。俺も時々自分の才能が恐ろしくなる……』

「……ありがとう」

「……………別に、良い」

紅さんはそう言うと、更に走るスピードを上げた……………って、この人さっきから段々とスピード上げてるけど、本気で走って無かったのだろうか？

「……………しばらく抱えてるけど、我慢して」

「あ、はい、わかりました」

少し恥ずかしいけど我慢しよう……………でも、やっぱり恥ずかしい……………てか、平均と比べれば少し軽いとは言え、男の俺を抱えるって凄いなあ……………そんな事を考えながら、俺は恥ずかしさを紛らわしていた。

第17話 サブタイに意味とかあるのだろうか（前書き）

書くぜ書くぜ

第17話 サブタイに意味とかあるのだろうか

「……………」

「……………」

はい、前回から紅さんの小脇に抱えられている主人公・日野光（16歳・性別男）です。

ちらりと首を動かし後ろをみると、さっきまで俺達を追いかけていた変人& a m p ;変態達が居なかった。どうやら、あいつらが仲間割れしてる間に振り切れたようだ。

「……………」

「……………」

そしてまた無言、お互い何も喋らない。

……やっぱ気まずい。すんごい気まずい。何かこの状況を打破する方法は無いのか……っ！ そう考えた所で、一つ話題が浮かんた。

「そ、そういえば紅さん」

「……………何？」

「いやさっきの話しの続きなんですが」

「……………話し？」

「いや紅さんの髪の色的事了。地毛か染めてるかわからない。って言ってたじゃないですか」

どうゆう意味何だろうか？ 普通わかるよな？

「……………私には、昔の記憶無い」

と考えていたら紅さんがど偉い事を言った。……え？ 記憶が無い……………？

「えーと……………それって……………」

「……………一般的に、記憶喪失と言われてる」

……………何か、マズイ事聞いた？

「えーと……………な、何かすいません……………」

「……………別に、謝る事は無い」

「は、はあ……」

心なしか、さっきより気まずい……クソ、俺のバカ！

「……………それで、髪の話しただけど、私が記憶を無くしたのがつい最近だから、髪についてはわからない……………たぶん、地毛だとは思う……」

「な、なるほど……」

そしてまた会話が止まる。クソ、本当に気まずい……何とか、何とかする方法は無いのか。

『……………♪』

何処からか、昔セ○サターン、ド○ームキ○ストで凄まじい人氣があった、S○G Aの某ギャルゲー……否、大○ゲーの主題歌が聴こえてきた。

「……………はい」

紅さんがポケットから携帯を取り出すと、ピッとボタンを押し、携帯を耳の所まで持っていた、恐らく、と言うか絶対誰かから電話が来たのであろう。

と言うか、何故にサ○ラ大戦！？ いや好きだけどねこのゲーム！ 皆様にオススメ出来るゲームだけど！

「……………わかった」

紅さんは携帯を切ると、更にスピードを上げた……本当、どんだけスピード上がるんだろう、さっきから俺の髪バサバサと舞い上がってるし。と言うか走るスピード速すぎないか？ てか人間が出せるスピードなのかこれ？ 思えばリ○ルバ○ターズは何故アニメにならないのか、何故ラノベ原作のアニメは黒歴史が多いのか、そして何故東京青少年育成条例案が通ったのか……世の中には何故こうしても不思議な事が多いのか……誰か教えて————

「って何考えてんだ俺！」

あぶねえ！ 今のはあぶねえ！ ちょっと壊れてきてないか！？
「……………どうしたの？」

「い、いや何でもないです」

「そう……」

ふう……落ち着け、COOLになるんだ俺、壊れたって良いこと
ない。そう、COOLになるんだ……したらもう、何も怖くない。
「そういえば、今の電話誰だったんですか？」

ふと浮かんだ疑問を聞いてみる。

「……………部長」

「部長？」

部長って誰だ？　と思っていると、

「……………ちよつと急ぐから、落ちないように気をつけて」

急に、視界がブレた——その瞬間、顔に今まで感じた事が無い、凄まじい暴風を顔に感じた。

「な——」

何じゃこりゃ！？　そう言おうとした所で、紅さんに口を塞がれた。

「……………あまり大きな声を出したら、見つかる」

そう言われても……ひとまず目を動かして周りを見る。すると、
景色が凄まじいスピードで動いていた。

「！……！！」

何じゃこりゃ！？　と心の中で叫ぶ、何で景色が動いてんだ……
いや、動いてるのは紅さん？　そこまで凄まじいスピードで動いて
るのか？　そんなバカな……と思いながらも紅さんの足を見る。

すると……足が『見えなかった』いや、足の部分にチラチラと動
く何かが見える……まさか、足を動かすのが速すぎて、足がはつき
り見えないのか……？　そんなバカな、これは夢か、夢なのか、そ
うに違うない。

俺はそう現実逃避した。

そう呟きながら周りを見る。周りには屋上などにあるフェンスがある。そして上を見ると、何やら久しぶりに見たような気がする空と太陽があり、身体には、さっきの暴風とは違う秋特有のやや冷たい風を感じる。

ここは……外？ いや屋上か？ 何で俺はこんな所に居るんだ？ てか屋上広いな、どんくらい広いかと言うと超広い。

「……………覚えてないの？」

「何を……ですか？」

そう言われて少し考える。確か紅さんに抱えられてて……………んで紅さんの電話が鳴って……………それで景色が動き出して……………紅さんの足が

「あー！！ 思い出した思い出した！！」

そうだ、俺はあまりに非常識な光景を見て現実逃避してたんだ。

「紅さん！ さっきのは一体何なんですか！？」

「……………そう言われても」

「まあまあ、落ち着け日野、母親似の可愛い顔が台無しだぞ」

「誰が可愛い顔だこの野郎！！」

このオッサン、言ってはならない事を言いやがって！！

「いや悪い悪い、あまりに女みたいな顔してるからな」

「てめオッサン！ ぜってー悪いと思ってねえだろ！！」

「はっはっは、あんまりカッコしてるとハゲるぞ？」

「誰のせいでカッコしてると思ってたんだこの野郎！」

「さあ？」

「さあ？ って何だよ！！」

「疑問符を含めて三文字の言葉」

「それを聞いてるんじゃないっ！ ……って、話が脱線しとる！」

「何で最後の部分が関西弁何だ？」

オッサンのツツコミを聞き流し、俺は紅さんに詰め寄った。

「えーと、紅さん、さっきのは一体……」

「……………世の中には」

「世の中には？」

「……………わからない事がいっぱいある」

そう言うと、紅さんは親指をグッと突き上げた。

ズルッ！ そんな効果音と共に、俺はずっこけた。

「いや答えになってませんよ!？」

「……………この世界の秘密を知るにはまだ早すぎる……………秘密を知るには全ヒロインのルートをクリアしてからニューゲームを……………」

「何処のギャルゲだよそれ!!」

「……………さあ？」

「さあ？ って何ですか!」

「……………疑問符を含めて三文字の言葉」

「それはもういい!!」

何だ!？ 紅さんもボケタイプなのか!？

「まあまあ、落ち着け日野。ちよつと悪ふざけが過ぎた」

「……………ごめん」

「だったら最初からボケないでくださいよ!」

「いや心に余裕を持たそうとしてだな……………とりあえず一回深呼吸して落ち着け」

オッサンの言葉に従い、すーはーすーはーと深呼吸をする。落ちて着いたような気がしないでもない。

「……………落ち着いた？」

「あ、はい。そんな気がします」

「……………良かった」

落ち着いた所で、またさっきの事を思い出す。

……………紅さんのスピードについてはツツコムなって事何だろうか？
けど気になる。だってあんなスピード出せる人間なんて居な——
——いや居る。よく考えたら近くに4人居る。

中学時代の知り合い、初と咲さん。そして母さんと親父……………何だ、別にツツコム事じゃ無いじゃないか。何してたんださっきの俺、混乱してたのか俺。

「どうした日野、急に黙って、もうツツコミは良いのか？」

「あ、ちよっと考え事を……ツツコミはもう良いです。よく考えたら別にツツコム事じゃ無いですし」

「へえ、そうか」

「……って、何で俺はここに居るんですか？ 職員室に向かうんじゃないかったんですか？」

そう言っていると、紅さんはオッサンを指差し、

「……………部長に呼ばれた」

と言った、部長って……このオッサンが？

「人を指差すな、ホムラちゃん」

「……………わかった」

部長と呼ばれたオッサンは、顔をしかめながらそう言った。

「……………部長？ あなたが？」

疑問を含めた口調で言うと、オッサン腕を組み、偉そうな口調で、

「いかにも、俺が常識人部部長、笹川秀平（がわしゅうへい）その人だ」

と言った。

「……………部長？」

そう呟いて、オッサン改めて、笹川さんを見る。

……どっから見ても三十後半のオッサンである。

「YES、部長だ」

「……………先生の間違いでは？」

だっておかしい、何で三十後半ぐらいのオッサンが部長何だ？

普通先生だろ。

俺の言葉に、オッサンはキョトンとした顔をする、

「先生？ 何でだ？」

と言った。

「いやその……制服は着てますけど、見た感じ笹川さんって学生に見えないような……」

本当、前々から疑問に思ってたけど、何で制服着てるんだろう？俺の言葉に、笹川さんは何かを考え出すと、直ぐに何かを思い出

したような顔をした。

「ああ、そういやまだ言って無かったな」

「何を……ですか？」

そう聞くと、次の瞬間笹川さんは耳を疑うような事を言った。

「俺、ここで二十年間留年し続けてるんだよ」

「……………は？」

留……年？ いやいやそんなバナナ、いやバカな。ありえん。

「……冗談ですよね？」

「マジだから、気がついたらこの歳だ」

「いやいやいや」

「いやマジだから」

「……紅さん、説明を」

「……………私もよく知らない」

「ほら、紅さんもう言ってるじゃないですか」

俺の言葉に、笹川さんは困ったような表情を浮かべた。

「そう言われてもな……事実なモンは事実だ、俺は実際二十年間留年してる」

「いやいやいや」

「いや本当マジだから」

「いやいやいや」

「マジだから」

「いやいやいや」

「マジだって」

「いやいやいや」

「マジ」

「いやいやいや」

「マー○・マ○・マ○——」

「言わせねえよ!!」

「おっ、ナイスツッコミだ、しかし懐かしいツッコミ方だな」

「そんな事は今はいいです!! いや本当に本当何ですか二十年間

留年!？」

「だから、マジだって言ってるんだろ? いい加減しつこい、おんなじ事ばっか言っても面白くねーんだよ、飽きてくるんだよ」

「そう言われましても……」

だって普通あり得ないだろ二十年間留年なんて……常識的に考えて。

「あー言っというて何だが、この話はまた今度にしないか? このままだと話がずっと平行線になりそうだし、何よりとっとと話を進めたいだよ」

「何か最後爆弾発言しませんでした?」

「気のせいだ、ほらほら、とっとと話を進めるぞ、こんなんで文字数稼いでも意味はねーんだよ」

「……わ、わかりました」

駄目だこいつ……早く何とかしないと……

「で、お前を屋上に呼んだわけだが」

「呼んだらわけは……?」

「ここから飛び降りてもらおう為だ」

「……は?」

笹川さんは、またしても耳を疑うような事を言った。

「……今なんと?」

多分聞き間違えたんだ、絶対そうだ、そんな事を考えながら聞き直した

「だから、ここから飛び降りるんだよ、フライアウェイだ」

「はぁ!？」

何言ってるんだこのオッサン!? やっぱ常識人じゃねえ!!

「飛び降りたら普通に死ぬでしょう!？」 何言ってるんですかあなた
!!」

「大丈夫だって、死ぬような高さじゃねえから」

そう言われて、フェンスまで駆け寄って下を見てみる。

「……………」

見た感じ、30メートル以上の高さだった。

「こんな死ぬに決まってるだろ!? グロイミンチになるわ!!」
そう言って、オッサンの目の前に移動し、胸ぐらを掴んだ。

「まあ待て、落ち着け、何も考えなしで飛び降りさせるわけねーだろ。グロイミンチなんざ見たくねーしな」

そう言われて、胸ぐらを離す、そうだよな、普通何か理由があるよな。

……でも

「……何で屋上から飛び降りる事になるんですか? とつと職員室に行きたいんですけど……」

てかよく考えると何か理由があったとしても屋上から飛び降りるっておかしいだろ、何納得仕掛けてるんだ数秒前の俺、いかん、頭が混乱してるのか、さっきから考えてる事矛盾しまくってるだろ俺。落ち着け、落ち着くんだ俺……。

「まずはこれを見て貰おう」

そう言って、笹川さんはポケットに手をつ突っ込むと、スマートフォンのような長方形の形をした物を取り出し、俺に手渡した。

……画面がついてるし、本当にスマートフォンみたいな物だな……。

「これは……」

「とりあえず画面の下ボタンを押してみてくれ」

そう言われてボタンを押そうとした時。。

「…………ポチッとな」

と紅さんが言った。

「え?」

何故にいきなりポチッとな? そんな事を疑問が浮かんだ。

「…………一人言」

「そ、そうですか」

そんな会話を交わし、俺はボタンを押した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4947h/>

光と奴らのスクールライフ！？

2011年10月10日03時23分発行